

地宝のひびき

—和歌山県内文化財調査報告会資料集—



写真：左）相方遺跡 集落跡
右）新宮城下町遺跡 地下式倉庫

平成 29 年（2017）7 月 23 日（日）
公益財団法人和歌山県文化財センター



新宮城下町遺跡調査区遠景



新宮城下町遺跡 地下式倉庫



相方遺跡 竪穴建物



仮庵山第2号経塚出土品 外容器と経筒



仮庵山第3号経塚出土品 合子・銭貨・刀子

開催にあたって

「地宝のひびき―和歌山県内文化財調査報告会―」は、文化財の発掘調査成果をいち早く県民の皆様に提供し、地域の歴史と文化に対する理解と認識を深めていただくことを目的として実施しています。

県教育委員会や県内各市町村の文化財担当者と連携し、平成 18 年度に第 1 回を開催して以来、おかげさまで途絶えることなく 12 回目を迎えることができました。

今回は、平成 28 年度に県内で行われた発掘調査の成果や、新たに県指定文化財にされたすさみ町所在の「立野遺跡」、田辺市所在の「仮庵山経塚群」の出土品、計 6 件について各文化財担当者から報告されます。

この報告会を通して、少しでも文化財を身近なものと感じていただくとともに、その保存や活用についても考えをめぐらせていただく機会になれば幸いです。

最後になりましたが、この報告会を開催するにあたりまして、ご協力、ご支援をいただきました多くの機関、関係者の皆様方に深く感謝の意を表します。

平成 29 年 7 月 23 日

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 櫻 井 敏 雄

開催日程

- 12:30 開場
- 13:00 開会挨拶
- 13:05 「地形環境復元と集落の形成 ―和歌山市津秦Ⅱ遺跡の調査―」
(公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 藤藪勝則
- 13:40 「山裾に展開する集落 ―相方遺跡の第2次発掘調査―」
(公財)和歌山県文化財センター 村田 弘
- 14:15 「よみがえる中世新宮津の姿 ―新宮市 新宮城下町遺跡の発掘調査―」
新宮市教育委員会 小林高太
- 14:50 休憩
- 15:00 「太田城水攻め関連遺構について ―友田町遺跡第7・10次発掘調査―」
(公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 菊井佳弥
- 15:35 「中近世の火葬墓を発見 ―吉原遺跡の発掘調査―」
(公財)和歌山県文化財センター 金澤 舞
- 15:55 「立野遺跡と仮庵山経塚群の出土品 ―新規県指定文化財の紹介―」
和歌山県教育委員会 丹野 拓
- 16:30 閉会挨拶

開催日時	平成29年7月23日(日) 13:00～16:45
会場	きのくに志学館(和歌山県立図書館)2F 講義・研修室 和歌山市西高松一丁目7-38
主催	公益財団法人和歌山県文化財センター
後援	和歌山県教育委員会、和歌山市教育委員会、紀の川市教育委員会、 新宮市教育委員会、公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団

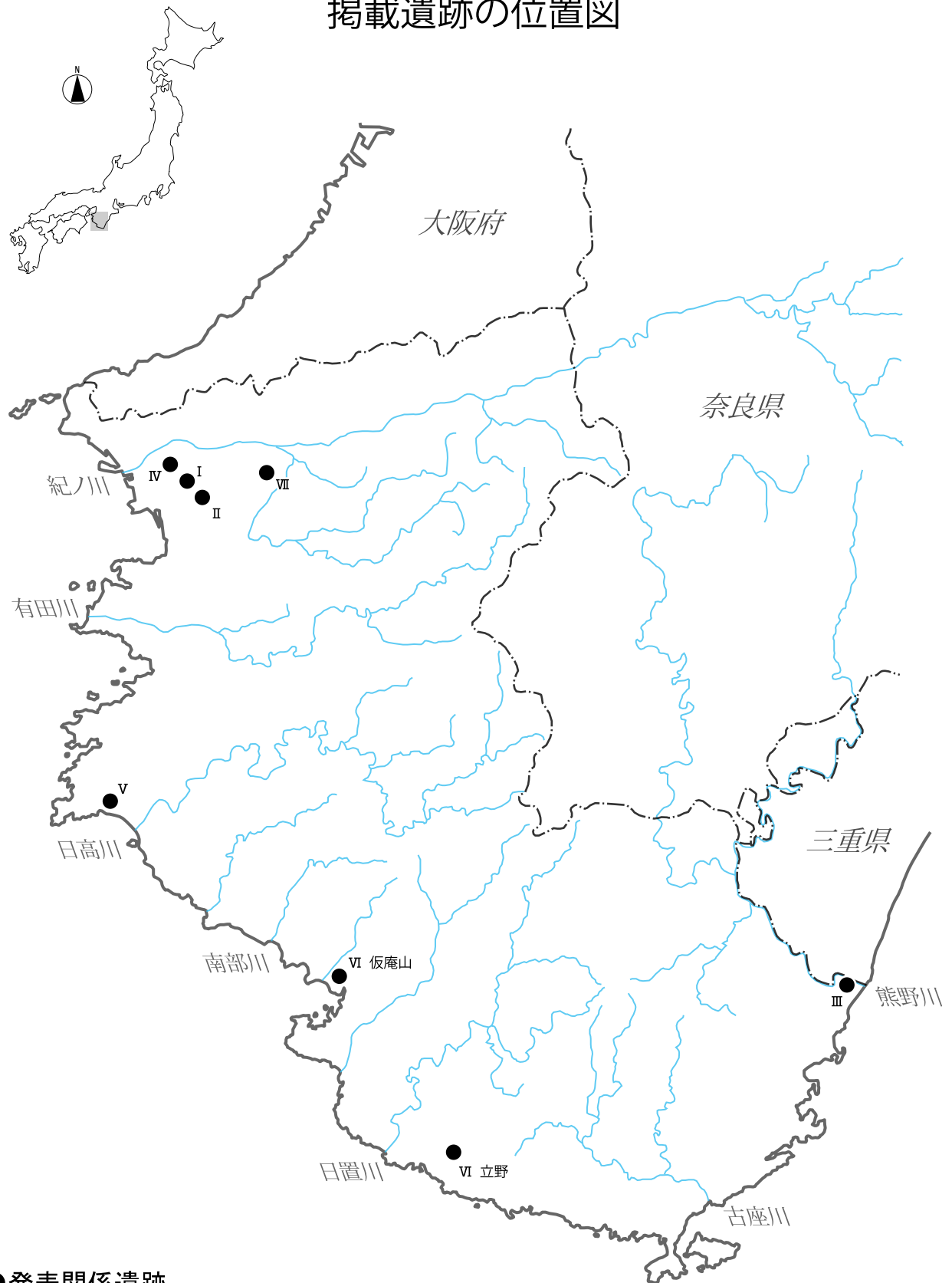
目 次

目 程	3
掲載遺跡の位置図	5
発 表	6
I 「地形環境復元と集落の形成 ―和歌山市津秦Ⅱ遺跡の調査― (公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 藤藪勝則	6
II 「山裾に展開する集落 ―相方遺跡の第2次発掘調査― (公財)和歌山県文化財センター 加藤達夫	14
III 「よみがえる中世新宮津の姿 ―新宮市 新宮城下町遺跡の発掘調査― 新宮市教育委員会 小林高太	22
IV 「太田城水攻め関連遺構について ―友田町遺跡第7・10次発掘調査― (公財)和歌山市文化スポーツ振興財団 菊井佳弥	28
V 「中近世の火葬墓を発見 ―吉原遺跡の発掘調査― (公財)和歌山県文化財センター 金澤 舞	34
VI 「立野遺跡と仮庵山経塚群の出土品 ―新規県指定文化財の紹介― 和歌山県教育委員会 丹野 拓	38

紙上発表	
VII 「奈良時代の須恵器窯跡 ―紀の川市 菩提池窯跡の調査― 紀の川市教育委員会 森原 聖	46

1. 本書は平成29年度に公益財団法人和歌山県文化財センターが実施した「地宝のひびき―和歌山県内文化財調査報告会―」の発表資料集である。
2. 本書掲載資料は正式な報告書が未刊行のため、今後、各資料の位置付けが変更される可能性がある。
3. 本書の編集は村田 弘・加藤達夫が担当した。

掲載遺跡の位置図



● 発表関係遺跡

※ローマ数字は目次のものと一致します。

地形環境復元と集落の形成

－和歌山市井辺遺跡・津秦Ⅱ遺跡の調査－

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター 藤敷勝則

1. はじめに

松島本渡線道路建設に先立つ発掘調査である井辺遺跡・津秦Ⅱ遺跡の調査は、和歌山県をはじめ和歌山市の事業として実施され、和歌山市では平成24～28年度にかけて井辺遺跡で7事業、津秦Ⅱ遺跡で3事業が行われた(図1・2)。

調査では、縄文時代晩期後半から弥生時代前期、弥生時代後期から古墳時代前期、平安時代以降の主に3時期の集落の跡が見つかった。今回は、これら3時期の集落の移り変わりを地形環境の変化と関連付けながら説明する。

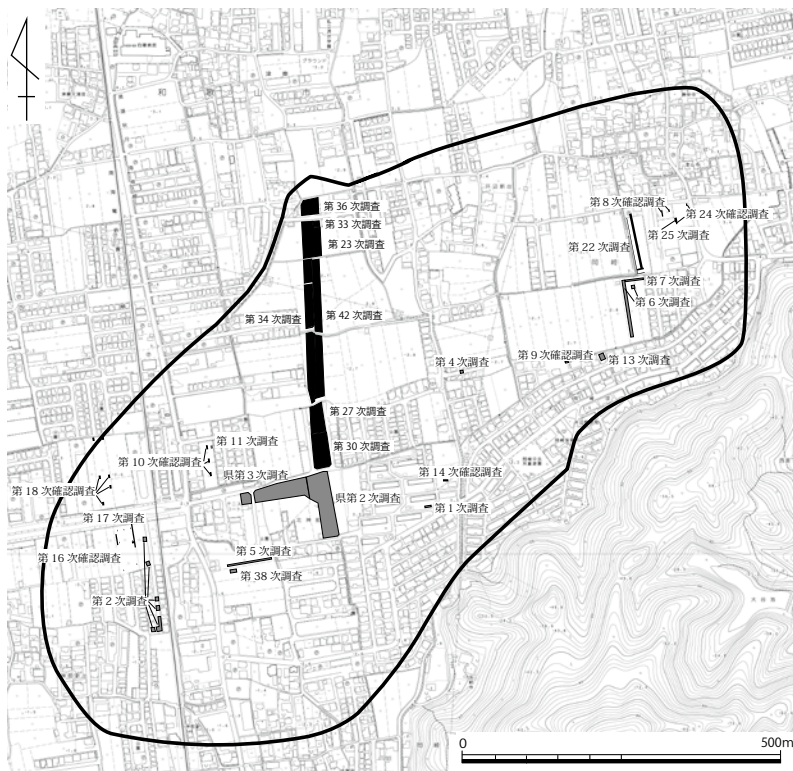


図1 井辺遺跡調査位置図

2. 和歌山平野南岸部の地形環境

和歌山平野南岸部に人々が集落を営み始めた頃の地形については、日下雅義氏が磯脇から西庄、松江、さらに湊から今福へと伸びはじめた砂州の発達過程と、紀ノ川の流れの移り変わりを示した地形分類図がよく知られている(日下1980)。図3は、日下氏が奈良時代(約1300年前)頃の和歌山平野の地形を復元した復元図である。このなかで地形を考える際に注目するところは、洪水などによって大量の土砂を運搬する河川の位置である。特に和歌山平野を形成した紀ノ川本流の位置は重要である。

この図には、現和歌川の位置に約1300年前の紀ノ川本流と河口の位置が示されている。近

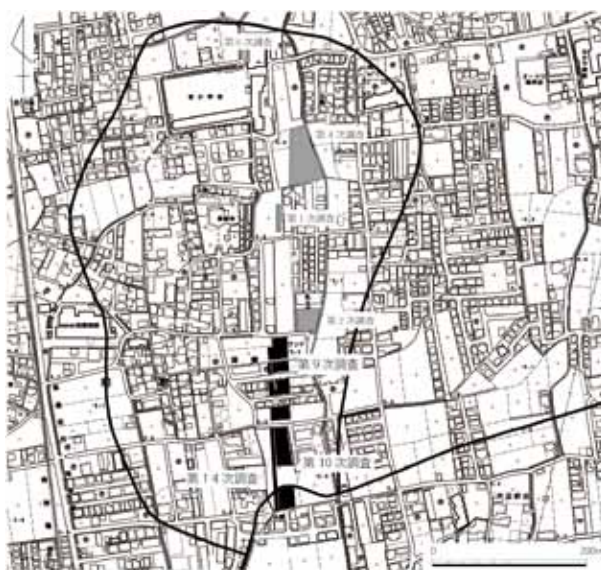


図2 津秦Ⅱ遺跡調査位置図

年、ボーリング調査や発掘調査による地層断面記録を分析した結果では、紀ノ川の本流と分流の河口が併存する場合、また自然災害による砂州の分断と河口位置の変更など、さらに詳細な検討を加えていく必要が指摘されている（趙2016）。

井辺遺跡周辺の地形は、日下氏はデルタ性平野とされている。デルタ性平野とは、紀ノ川の分流が蛇行して流れ、その流れの移り変わりによって、微地形と呼ばれる自然堤防の高まりや埋没した河川跡などの湿地がみられる場所を意味する。このような小地域の微地形を復元することは、なぜそこに集落が営まれることになったのかを理解するための基本的な作業と考える。

また発掘調査前の準備として、調査対象である遺跡の範囲内など狭い範囲の微地形を知るには、国土地理院が公開している土地条件図を利用することが有益である（図4）。土地条件図には、自然堤防の高まりや湿地のほか、埋没した河川が色分けして図示されており、調査開始前から地下の地層の状態を想像することができる。ただし、この図に示された微地形は、現在までに形成されたすべての時代の微地形が示されている。よって地形を復元する場合は、発掘調査で確認された同時期に存在した地形情報が大変重要になる。

土地条件図には、井辺遺跡・津秦Ⅱ遺跡の範囲内に複数の埋没河川や自然堤防、湿地が図示されている。今回の調査では、これらの微地形の形成過程の一端を確認することができた。次に、発掘調査で明らかとなった地形変遷と各時代の集落跡について述べる。

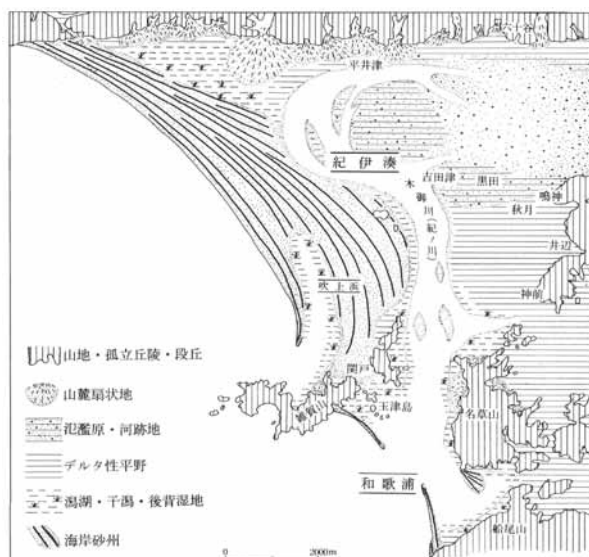


図3 和歌山平野の地形復元図（奈良時代頃）
※日下 1980 から引用



図4 和歌山平野南岸の土地条件図

※国土地理院 HP からダウンロード（遺跡範囲は筆者加筆）

3. 井辺遺跡・津秦Ⅱ遺跡における微地形と集落

(1) 縄文時代晩期後半から弥生時代前期の様相 (図5)

発掘調査の結果、井辺遺跡から津秦Ⅱ遺跡にかけての南北に長い地層断面を観察すると、井辺遺跡第27次調査地北東端から第34・42次調査地南東端との境界付近、また第34・42次調査地の中央部付近、さらに津秦Ⅱ遺跡第10・14次調査地南半には、縄文時代晩期後半以前に形成されていたと考えられる自然堤防（自然堤防1～3）が見つかった。この自然堤防は、細かい砂粒が高く堆積してできた微高地と呼ばれる地形である。そのうち自然堤防1は、南北幅50m以上を測り、調査区の西側に広がりをもち、また自然堤防2は、北東から南西方向に細長く伸び、南北幅は45～56mを測る。

調査では、自然堤防1・2上部の低地への稜線部分において、両遺跡では初めて縄文時代晩期後半から弥生時代前期の地面を掘り凹めた穴のほか、突帯文土器を棺として利用した墓が見つかった。また、自然堤防1・2の上部から低地へ落ち込む傾斜面上部の堆積土からは、当時の土器や石器が多数出土した。これらの遺構や遺物は、井辺遺跡・津秦Ⅱ遺跡に集落が営まれ始めた頃のものとする。

各自然堤防の間に広がる低地には、粘質土が厚く堆積している。この低地の環境について現段階では詳述できないが、河川など強い水の流れにより運搬される比較的粗い砂粒がみられず、細かい粘質土が堆積していることから湿地などであった可能性がある。

そのなかで自然堤防1の北側斜面において、粘質土を掘り下げたところ、樹木の根が生育していたそのままの状態で見つかった。その特徴は、根を伸ばす方向が斜面上部に向かって伸びていることである。これは、河川岸の河畔林にみられる根の生え方と類似する。よって、自然堤防1の北側には川が流れていたと考える。その流路方向は、自然堤防1北側稜線の方角である北西から南東方向と考える。この河畔林は、洪水などによって短時間に埋没し、水分を多く含む粘質土に埋もれていたため現在まで遺存したと考えられる。

人が集まり長期にわたり生活を営む集落には、雨露を凌ぐ住居と食料を生産する耕作地が必要である。今回の調査では、これらの痕跡を確認できなかったが、今後この自然堤防の上部において住居跡のほか、低地への斜面地では水田が見つかる可能性がある。

(2) 弥生時代後期後半から古墳時代前期の様相 (図6)

縄文時代晩期後半以降、自然堤防の周辺に広がる低地は、洪水などの自然災害で流されてきた土砂が少しずつ堆積することで埋まり始める。その埋没する状況を確認するため、井辺遺跡第34次調査において低地部分の粘質土を深く掘り、その地層断面を観察したところ数単位の薄い古土壌が確認できた。古土壌とは、地表面が離水し、草木が茂り根を生やしては枯れ、地表近くを小動物が活動することによって腐植が進んだ結果、地層上部に生成される暗色の土壌である。つまり、古土壌上面は当時離水した地表面を示すと言える。

このことから低地部分は、縄文時代晩期後半以降、乾いては水没するというサイクルを繰り返す状態が長く続いた後、弥生時代後期頃には比較的長期にわたり草木が繁茂し厚い土壌が生成される環境になったことが明らかとなった。

調査では、この低地に生成された肥沃な土壌がみられる範囲において、初めて弥生時代後期後半から古墳時代前期の水田や灌漑用水路のほか、古墳時代前期の畠が見つかった。検出した場所

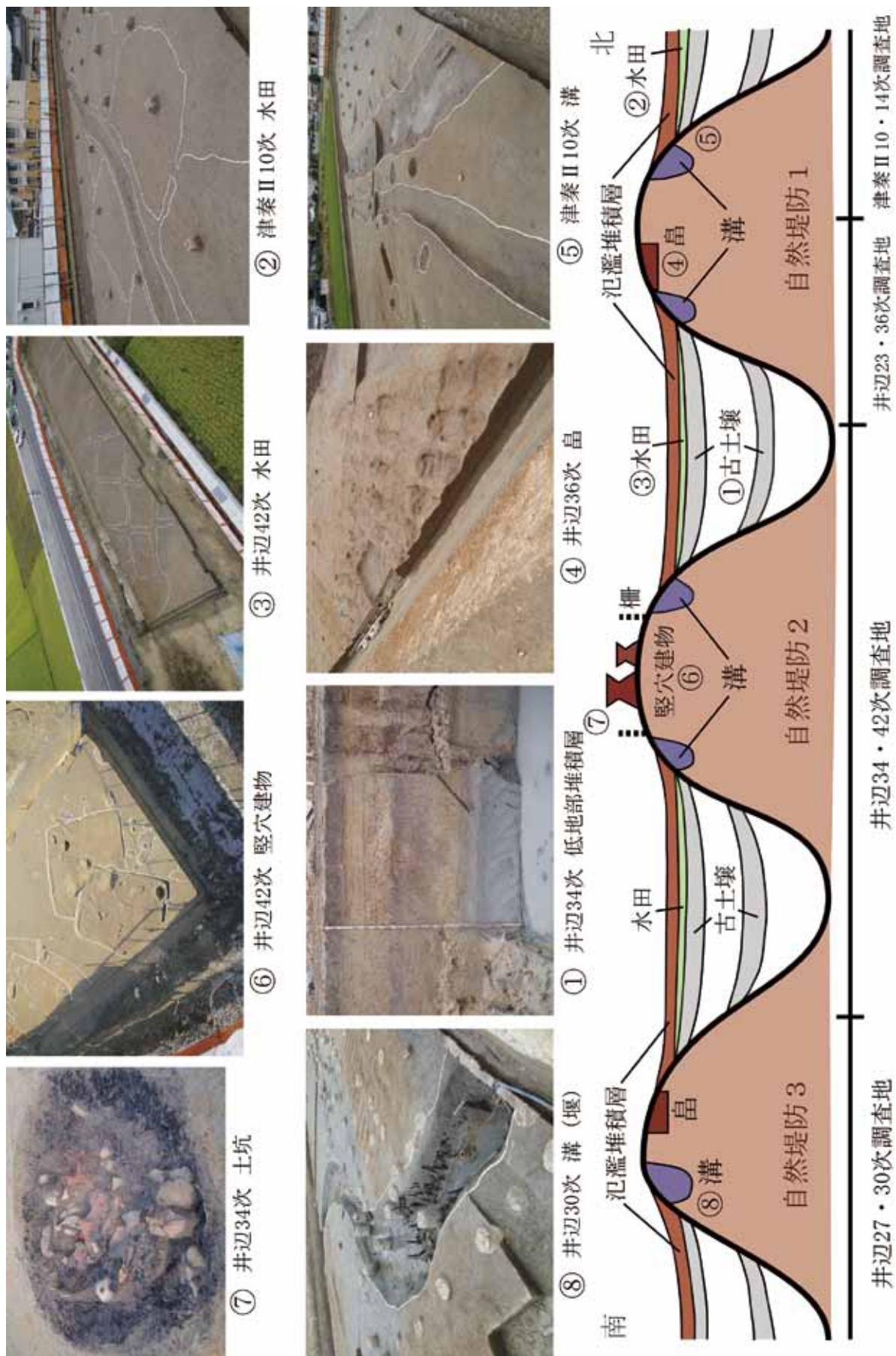


図6 弥生時代後期後半から古墳時代前期の地形環境と検出遺構模式図

は、水田が自然堤防1の北側と自然堤防1・2の間、2・3の間、畠が自然堤防1・3の南側などである。水田は、小区画水田と呼ばれるもので、一辺2.0～7.0 mを測る長方形や正方形、または三角形に畦畔で整然と区画されている。特に自然堤防1の北側で見つかった水田は、水を引き込むまたは排水する灌漑用水路の左右に広がるもので、水田耕作の様子がよく分かる事例である。灌漑用水路とみられる溝には、木杭を打ち込み、水位の調節を行う井堰を伴うもの、また2条の溝間を敷葉工法による堤で補修したものなどがある。これらは、当時の治水技術を示す遺構として貴重である。

畠は、畝と畝間溝を確認した。自然堤防1の南側で検出した畝間溝は、上端幅で0.5～0.6 mを測る。このほか、自然堤防3の南側などでも畠と考えられる畝や畝間溝が見つまっている。畠は、集落内部における食糧生産の一端を示す重要な遺構である。

自然堤防の上部では、低地で水田や畠を営んだ人々が暮らした生活の痕跡が多数見つまっている。特に自然堤防1・2では、居住域と生産域との境となる低地へ向かう稜線付近に溝が掘削されていた。またこの溝に区画された内側には、竪穴建物、掘立柱建物や柵列のほか、大量の土器が炭とともに棄てられたごみ棄ての穴なども見つまっている。

これらの生活痕跡は、調査地周辺の地形環境の変遷という自然の営みのなかでは、ある一時期の人間活動を示すものに過ぎない。調査では、前述した集落が洪水とみられる自然災害に遭って埋没し、廃絶したことを示す氾濫堆積層を確認した。この氾濫堆積層は、低地にある水田や灌漑用水路、また畠を覆って堆積しており、自然堤防上部では確認できない。今回の調査において水田や畠が遺存状態良く検出できたのは、氾濫堆積層が低地に厚く堆積し、後述する人による大規模な地形改変を免れたためである。

(3) 平安時代後期末から鎌倉時代の様相 (図7)

今回の調査では主に自然堤防1の上部及び、その北側低地部分における津秦Ⅱ遺跡第10・14次調査において、平安時代後期末以降の可耕地拡大を目的にした地形改変の様相を確認した。その様相は、平安時代後期末の水田及び耕作痕と鎌倉時代以降の耕作痕が見つかる範囲の違いとして明瞭に現れている。

平安時代後期末の水田は、自然堤防1の北側稜線の方に沿って水田耕作に伴う段が遺存していた。この水田に伴う耕作痕は、溝状を呈するもので自然堤防1の手前でその掘削を止めていた。これらのことから、平安時代後期末にはまだ自然堤防1の高まりが存在していたと考える。

鎌倉時代の耕作痕は、連続する小溝群であり自然堤防1の上部全域に広がりをもって見つかった。この鎌倉時代の耕地開発は、調査区壁面の観察から自然堤防1の上部を大規模に削平して行われたことを確認した。よって、鎌倉時代の調査地周辺の地形環境は、可耕地の開発という人間活動によって大きく改変されたと考える。

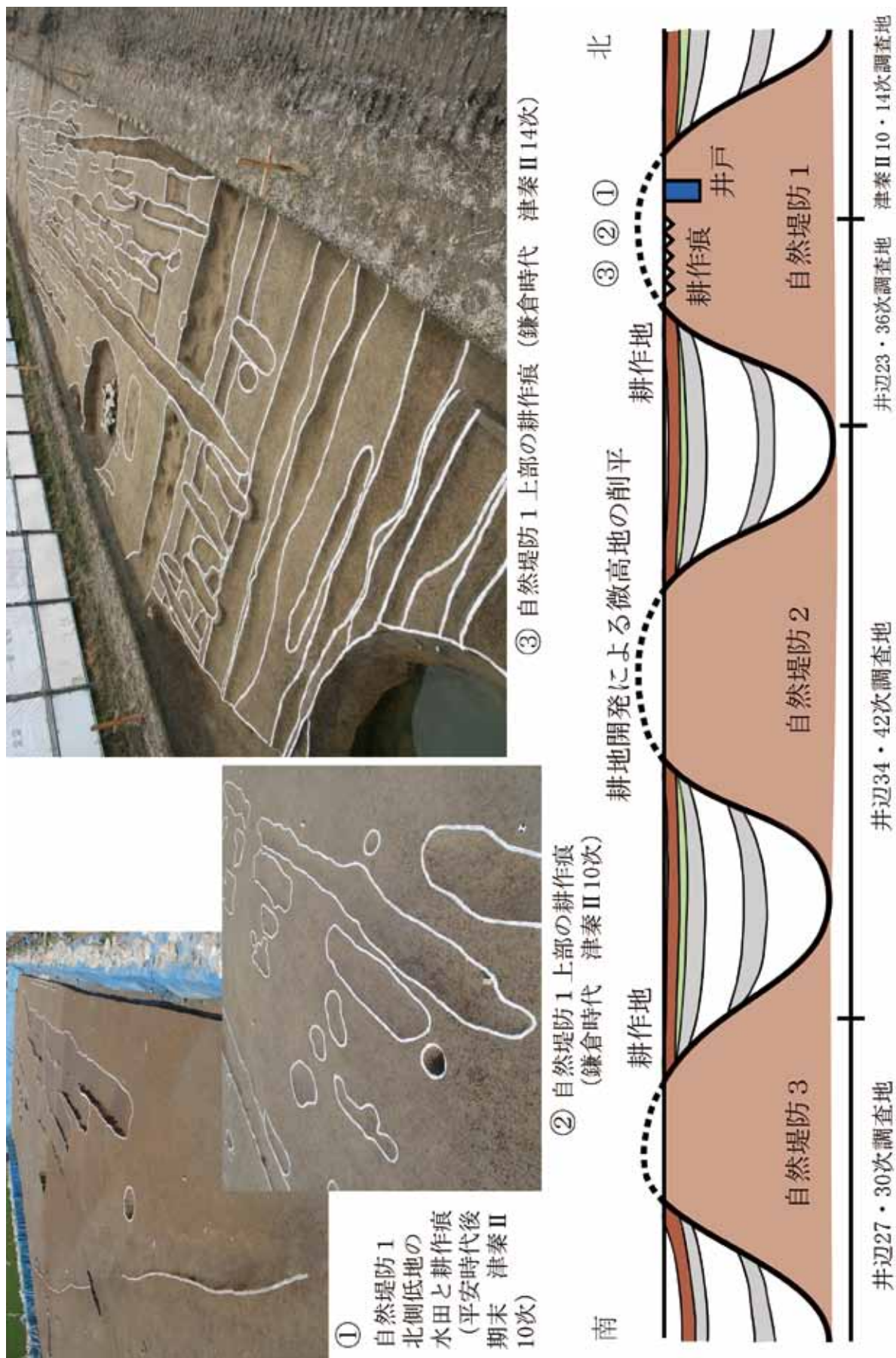


図7 平安時代後期末から鎌倉時代の地形環境と検出遺構模式図

4. まとめ

地形は、ひとときも留まることなく絶えず変化する。その変化の要因には風、雨、波による土砂の浸食や運搬、地震、津波、洪水、高潮、崖崩れなどの自然災害の他、人による改変がある。例えば、水路の掘削や堰の構築、水田開発、自然堤防の削平や河川の付け替えと固定化などである。つまり人は、過去から現在まで自らが生活を営む地形環境に手を加え続けてきた。

今回の調査で確認した
3 時期の集落を地形変遷
のなかで評価すれば、縄
文時代晩期後半から弥生
時代前期は、自然の地形

に依存し集落を形成し始めた段階、弥生時代後期後半から古墳時代前期は、水田開発と水路の掘削などに地形を利用する段階、平安時代後期末から鎌倉時代は、可耕地の拡大を目的に地形を改変する段階と言える。

また当然のことながら、集落遺跡を調査するうえで、地形の変遷を考慮することは見つかった遺構の評価にとって重要な示唆を与える。例えば、縄文時代晩期後半から弥生時代前期の遺構が、自然堤防から低地への稜線部分のみで見つかっているのは、微高地のより高所にもあった生活痕跡が鎌倉時代以降の耕地開発によって削平されたからであって、当時の集落の範囲がその縁辺部に限られていたとは言えないのである。

最後に、発掘調査で確認される古土壌のほか、自然災害痕跡である氾濫堆積層は、同じ時間を共有する遺構、また旧地表面を特定する鍵層となる。各遺跡間において、同じ鍵層をもとに基本層序を確立することは、時期別に集落の立地環境と地形の変遷を復元する糸口になる。そして、何よりも自然災害痕跡からその災害の規模を復元し、有益な情報として発信することは考古学の役割であり、今後の防災及び減災に繋がっていくものとする。これからの課題である。

[参考文献]

日下雅義 1980 『歴史時代の地形環境』 古今書院

趙哲濟 2016 「第1章第1節地理的環境」『太田・黒田遺跡第78次発掘調査報告書』

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団 2016

和歌山市教育委員会 2017『和歌山市の文化財／パンフレット井刃遺跡』

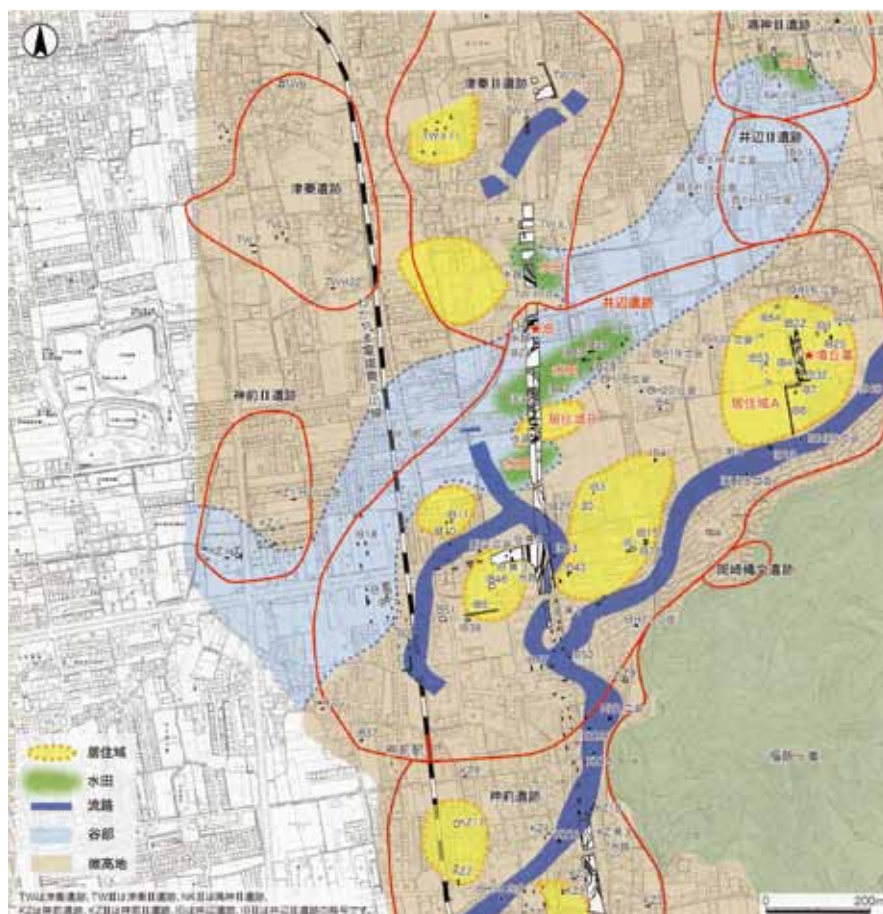


図8 井辺遺跡・津秦Ⅱ遺跡周辺の地形と遺構分布図

※弥生時代後期後半から古墳時代前期の地形復元 和歌山市教育委員会 2017 から引用

山裾に展開する集落

—相方遺跡の第2次発掘調査—

(公財)和歌山県文化財センター 加藤達夫

1. はじめに

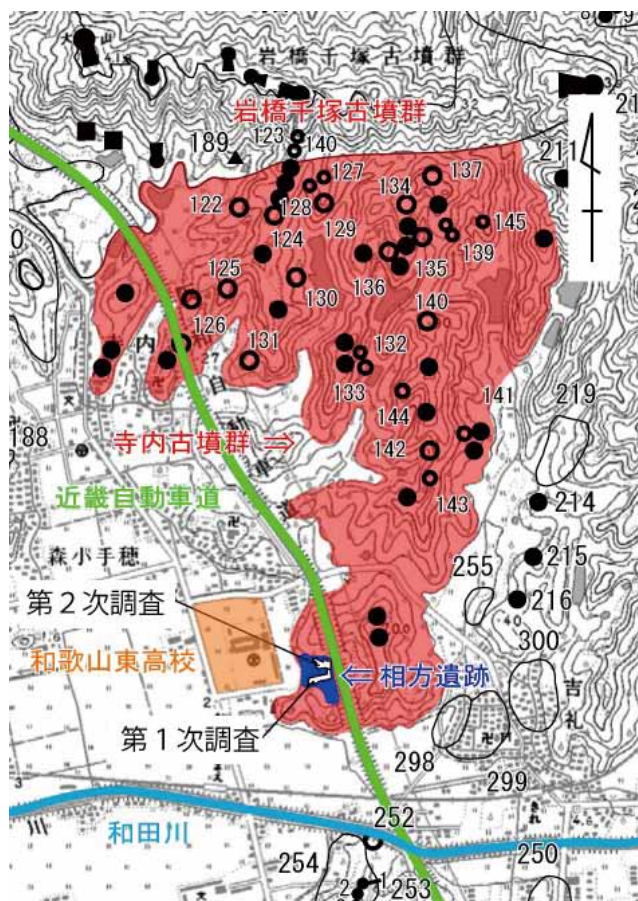


図1 調査区の位置

相方遺跡は、和歌山電鉄岡崎前駅から北東に500mほど、和歌山東高校の東側に位置している。

今般、この地点に西日本高速道路株式会社の計画する近畿自動車道と歌山南スマートインターチェンジ（仮称）と、これに結ぶ県道及び海草振興局建設部の新庁舎が建設されることとなり、これら一連の工事に先立って記録保存のための本発掘調査が実施されることとなった。

調査面積は1,904㎡で、調査期間は平成28年5月中旬から11月中旬まで行った。現地での調査終了後、出土遺物等の整理作業を行い、平成29年3月に報告書を刊行して業務を完了した。

相方遺跡は、調査に先立ち和歌山県教育委員会により行われた分布調査、試掘確認調査により新たに散布地として登録された新規発見の遺跡である。その範囲の一部は、寺内古墳群の範囲と重複するが、今回の調査では古墳は検出されておらず、集落跡であったことから実質的には相方遺跡を調査したこととなる。



写真1 4区全景



写真2 5区全景

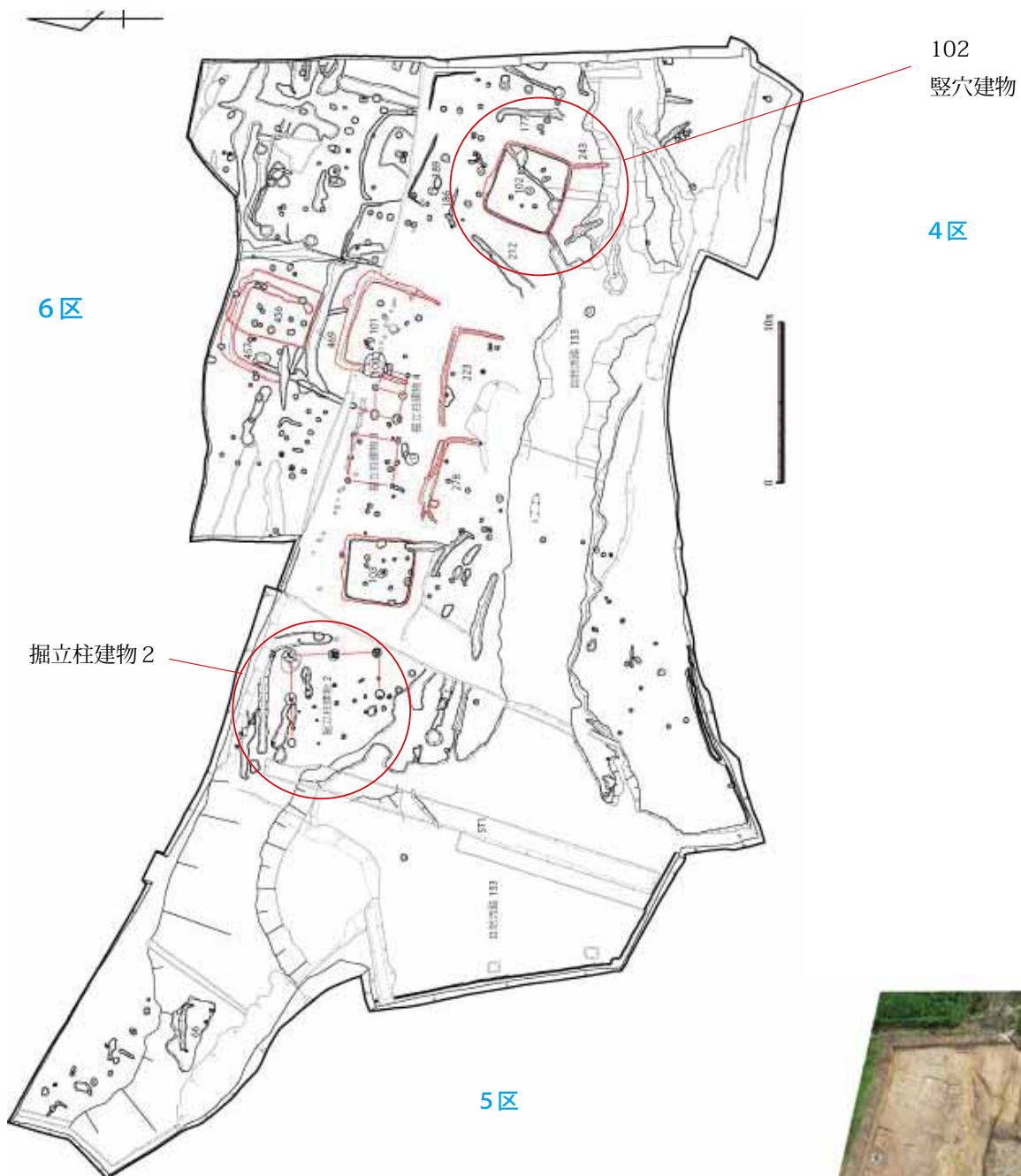


図2 遺構全体図



写真3 4・5区の全体写真（合成）

2. 第2次調査の概要

今回の調査地は、現有里道を挟んで第1次調査の北側に位置する。調査地の北及び東側は丘陵の裾部に当たっており、現況は果樹の段々畑で、1番上の畑の標高は8.8m、1番下の畑は5.0mを測り、標高差は4.0mほどであった。調査は、第1次調査において1～3区とし、今回の第2次調査は、これを踏襲し4・5・6区の3区に分けて調査を行った(図2)。

耕作土下の遺物包含層の厚さは、箇所によって異なるが0.3mから1.0mと比較的厚いものであった。この遺物包含層を取り除いた面が明黄褐色ないし明赤褐色の基盤層で、この面において遺構の検出を行った。その結果、図2に示したように数多くの遺構を検出している。調査地は、山裾から続く南向きの斜面地であり、なかでも4区の北側・5区の東側・6区は比較的緩やかな斜面であることからこの部分で遺構が集中して検出されている。反面、5区の西側は、斜面の勾配が急なことからその遺構密度は極めて少ない状況であった。

検出された主な遺構を挙げると計8棟の竪穴建物(図2で赤い線で縁取った方形の遺構)と、掘立柱建物が3棟検出されている。その他に、小穴、土坑、溝、溜枳などが検出されている。以下、これらの遺構とその出土遺物について述べる。

3. 第2次調査の主な遺構と注目すべき遺物

【竪穴建物】

竪穴建物については、図2に示したように8棟が検出されている。これらの竪穴建物については、建物の重複関係や、出土した遺物などから推して、すべてが同時に存在していたものではなく、多く見積もったとしても同時に存在していたのは2ないし3棟程度であったと思われる。その時期に



写真4 102 竪穴建物(南西から)

つについては、平面形や炉をもつ構造であること、出土した遺物などから弥生時代の終末期～古墳時代の初頭に帰属するものと考えられる。このうちの比較的遺存状況が良好な 102 竪穴建物について詳述しておく。



写真 5 102 竪穴建物遺物出土状況（西から）



写真 6
二重口縁壺



写真 7
甕



写真 8
高坏



写真 9
器台



写真 10
小型丸底土器

102 竪穴建物は、調査区の最も東側で検出された遺構である。平面形は、一辺が約 5.0m の正方形で、深さは北側の残りのよい部分で 30cm ほど、南側になるにつれ浅くなり最も残りの悪い部分では 4 cm 程度であった。床面では径 28 ～ 40cm、深さ 20 ～ 48cm ほどの 4 つの主柱穴が検出された。また、これらの中心付近では炉が検出されている。炉の底の一部には火を焚いた跡が赤く残存していた。さらに住居の南東隅から幅 20 ～ 25cm の排水のための溝が延びていた。この溝からは、庄内～布留式併行期の壺・高坏が出土している。また、建物が機能を失い埋没する過程で、多くの土器が投棄されたらしく、建物の埋土からは写真（6 ～ 10）として掲示したような多くの土器が出土している。

また、この建物の床には貼り床が施されていた。調査の最終段階でこの貼り床を除去し、下面を確認したところ、その下層から一回り小さな楕円を描く溝を検出した。溝の長径は約4mを測り、102 竪穴建物よりも一回り小さいものである。この溝については、竪穴建物の壁沿いをめぐっていた壁溝と推定されるものであり、拡張して建てられた 102 竪穴建物の前身建物の可能性も考えられるものであるが、周溝の形状が楕円形を呈することから一時期古い別の建物の可能性も考えている。さらに、102 竪穴建物の外側、東、西、北に溝が検出されているが、これら3条の溝は 102 竪穴建物の穴を掘った時に出土した土を盛り上げた周堤帯の外側を巡っていた溝の痕跡と考えている。なお、102 竪穴建物の帰属時期については、出土した遺物から古墳時代初頭のものと推定している。

【掘立柱建物】

今回の調査では、掘立柱建物も検出されている。このうち最も柱穴のしっかり遺存していた掘立柱建物2について述べておく。検出規模で2間×2間、柱間は約2.7mを測る。柱穴の直径は60～70cmほどであった。(写真11)。

柱穴の中には、柱が残存しているものもあった。柱の直径は、少なくとも20cmはあり、また柱の下には、結晶片岩を据石として、1段ないし2段重ねで置いているものも確認している。据石の役割は、柱の不等沈下を防止するほか、柱の頭の高さを揃える目的があったものと考えられる(写真12)。

この掘立柱建物は、緩やかな斜面で検出されたものであるが、柱穴の底や据石の上の面の高さは標高5mほど(±10cm程度の差)の高さに揃えられていた。このことから元々は平坦な場所に建てられていた可能性がある。建物が放棄された後、開析作用により南西側の地面が削りとられ斜面



写真11 掘立柱建物2



写真 12 据石のうえに残った柱根

地になったと考えられる。柱の大きさや柱間の距離などから本来はもう少し規模の大きい建物が推定されるが、南西側については、削り取られ柱穴が残らなかったものと考えている。また、建物跡脇の半L字型の溝も、建物の軸と並行することから、この建物に関係する可能性が考えられる。この建物の時期については、柱穴から出土している瓦器碗片を根拠に鎌倉時代前期のものと判断した。

【溜 桧】

5区中央北端付近で検出した遺構である。掘方は長軸 2.0m × 短軸 1.5 m の楕円形で深さ 1.0m であった。穴の内側に結晶片岩の割り石を積み上げて長方形の桧を構築している。内法は上端で約 1.0 m × 1.2 m であった。検出した当初は石組の井戸と考えていたものであるが、埋土を底まで掘り下げた結果、底は固く締まった基盤層であり、地下水が通る砂の層まで掘り込まれておらず、完掘後も湧水がほとんどなかったことから井戸ではないと判断した。ただし、溜桧とした場合の導水施設や、オーバーフローする水を排水する排水溝は検出されなかったことから、井戸である可能性も留保しておきたい。溜桧の石組周辺と遺構の埋土から瓦器碗や備前焼の鉢などが出土しており、その帰属時期については鎌倉時代と推定している。

【自然流路】

自然流路は、4区中央やや南寄りを西流し、5区に入ると幅が広がり調査区のさらに西へと延びることが判明した。自然流路の埋土は、上層（青灰色のシルト）、中層（黒色の粘土と砂層の互層）、



写真 13 溜枥 100（南西から）

下層（灰色砂）に大別できる。埋土の上層から中層にかけて弥生時代終末期～古墳時代の遺物が多く出土するものの、それらとともに、中層からは奈良時代～平安時代の遺物が、上層からは、鎌倉時代の遺物が出土した。流路が流れていた時期、埋没した時期を決める鍵となるのは、中層から出土した古代の遺物と、上層から出土した中世の遺物である。自然流路は奈良時代～平安時代に流れ始めたと推定でき、水流により周囲の弥生時代・古墳時代の遺構を浸食し、遺構埋土に含まれていた遺物は土とともに押し流され、下流部で川底に再堆積していき、徐々に埋没していったと推定できる。上層で、鎌倉時代の遺物が出土したことから、鎌倉時代頃にはこの自然流路はほとんど埋まっていたと考えられる。

【注目される遺物】

5区の自然流路の肩付近でほぼ完全な形の土師器坏が見つかったが、この坏の底部には、ややかすれているが墨書が認められた（図3の右、写真15）。読み方は「だいに」であろうか。その他にも、見込部分にヘラ描きで「大」と書かれた土師器が5区の遺物包含層から出土している（図3）。両者に共通する「大」のもつ意味は現在のところあきらかではない。

ただ、「大」の類例については、寺内古墳群、相方遺跡から北北東約2.5kmに位置する和歌山市鳴神Ⅴ遺跡からの出土例が知られている。須恵器の坏蓋の天井部に「大」と墨書で記されており、中世の遺物を含む方形土壇の盛土から出土したもので、器形から平城Ⅳ段階の坏蓋と考えられる。この文字の意味するところについても不明であるが、今後類例が増加することにより、何らかの意味が見いだせる可能性がある。その意味では注目しておきたい遺物と言える。

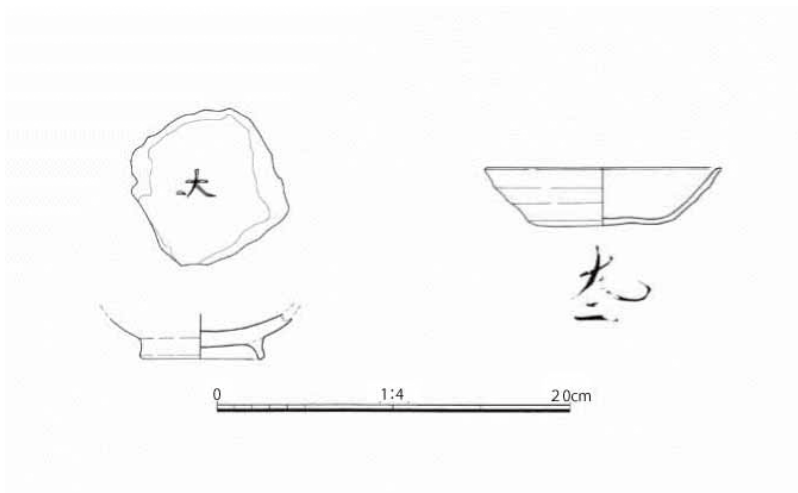


図3 相方遺跡出土の「大二」の墨書のある土師器壺（右）と見込に大のへう描きのある土師器碗（左）



写真 14



写真 15 土師器壺底面の墨書

4 ま と め

第2次調査では、合計8棟の竪穴建物跡が検出された。出土遺物が少なく帰属時期が判然としな
いものもあるが、いずれも平面形や構造から概ね弥生時代終末期から古墳時代前半に帰属する可能
性が高いものと考えられる。したがって、集落はこの時期に一つのピークがあったといえる。この
後に続く、飛鳥時代、奈良時代、平安時代のものといえる遺構は明瞭には確認できなかったことか
ら、集落の活動は一旦下火になるようである。つづく鎌倉時代に入ると既述した掘立柱建物2や溜
枥などの遺構や遺物が示すように再び活況を呈する。これが第二のピークである。ただし、この時
期もさほど長くは続かず、遺物の出土量などから推して室町時代に入ると再び衰退していったこと
が窺われる。

このような消長を経る相方遺跡であるが、最後に立地とその性格について述べておきたい。冒頭
でも概述したように、相方遺跡は丘陵の山裾部に当たっている。やや細かく見ると、南北と東側か
ら山裾が緩やかに延び平地と接する上に立地しており、西側は拓けている。この西側域は現在水田
となっており、一面に平坦面が続いている。このため集落の立地としては西側のほうが適したよう
に思えるが、この西側は弥生時代末から古墳時代にかけては低湿地であったと考えられている地域
である。

こうしたことから集落は低湿地を避け山裾部、それも低湿地とさほど高低差を有しないこの地に
占地したものと考えられよう。

集落の規模としては、現在のところ南北 150 m、東西 100 mほどの範囲が想定されており、大
規模な集落になるとは考え難い。こうしたことを踏まえて言えばまさに「山裾に展開する集落」で
あると言えよう。

その生産域や墓域などについては、今回の調査ではまったく見つかっておらず不明と言わざるを
得ない。したがってこの集落の性格について言及する資料を持ち合わせていないのが現状である。
逆に言えば、今回の調査で明らかになった山裾に展開しているこの集落の全体像をつかむことが今
後の課題とも言えよう。今後の周辺の調査、それによる資料の蓄積に期待したい。

よみがえる中世新宮津の姿

—新宮市 新宮城下町遺跡の発掘調査—

新宮市教育委員会 小林高太

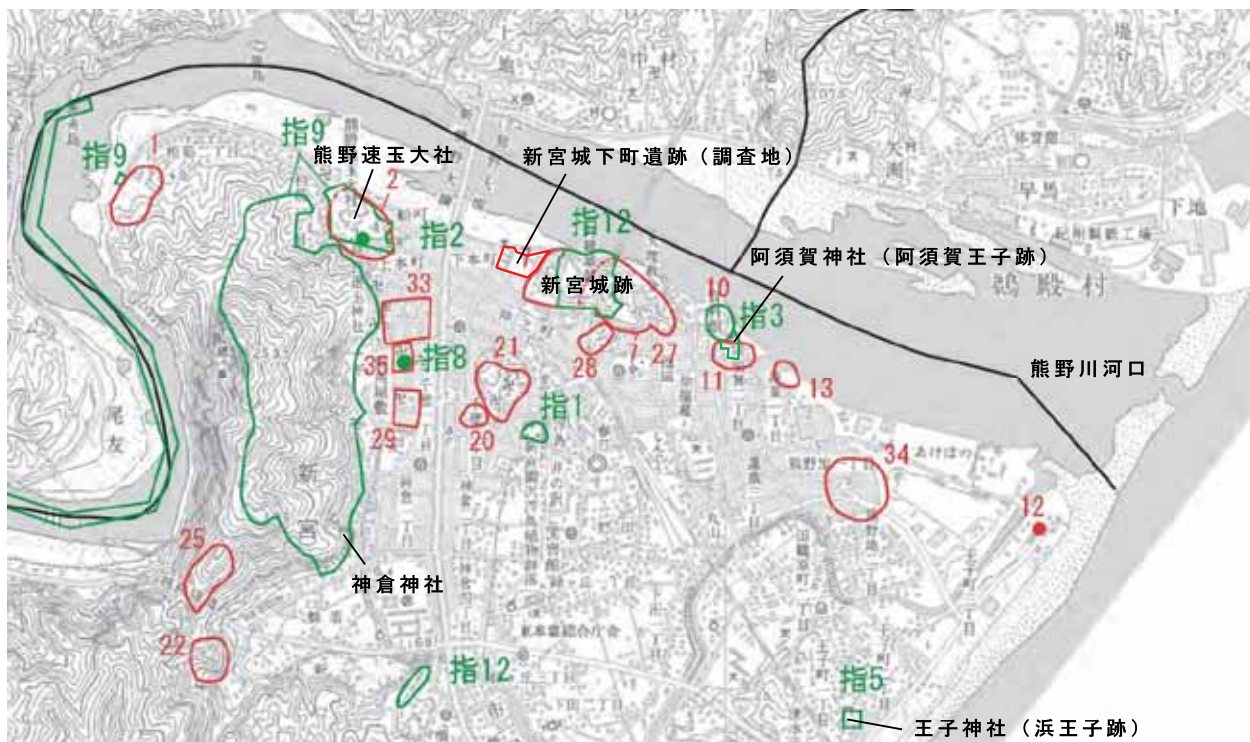
1. はじめに

新宮市では文化複合施設の建設計画を進めている。建設予定地では平成27年度に実施した試掘調査で遺跡が確認され、埋蔵文化財包蔵地「新宮城下町遺跡」として新規認定された。その後、複数回にわたり発掘調査（第1次調査・確認調査（1・2））を実施している。調査箇所は、旧丹鶴小学校及び旧丹鶴幼稚園の敷地内で、東側に国史跡新宮城跡がある丹鶴山がせまり、北側に熊野川が流れる。熊野川の河岸段丘上に立地し、付近の標高は約9mを測る。

2. 新宮城跡周辺の歴史

熊野川は河口付近に大きな沖積平野を形成せず、山間部を抜けてすぐに海に注ぐ。河口付近のわずかな平野に新宮市街地が形成されている。古代以前の遺跡の多くは、熊野川右岸に沿う微高地上に立地し、縄文時代から中世の遺跡である速玉大社境内遺跡や、弥生時代後期～古墳時代の竪穴建物が見つかった阿須賀神社遺跡などがある。

平安時代後期から鎌倉時代にかけて、熊野三山への参詣は上皇・貴族により隆盛を極める。丹鶴山一帯は、熊野三山の一つである熊野速玉大社から阿須賀神社（阿須賀王子跡）への参詣道沿いに位置し、古くからの要衝の地にあたる。近世の編纂書である「熊野年代記」を根拠にすれば、付近には、平安時代頃には熊野別当が別邸を築き、平安時代末頃には別当屋敷が移されたともある。その頃に、丹鶴山（丹鶴城）の名称の由来にもなっている「丹鶴姫（鳥居禅尼）」が東仙寺を建てた



第1図 新宮城下町遺跡周辺の遺跡分布図

との記録も残り、同じ頃に丹鶴山南麓には香林寺（宗応寺）があったとされている。また、丹鶴山周辺からは、中世墓地の遺物として東海地方の陶器類が多く出土しており、場所を移した現在の東仙寺や香林寺に伝わる五輪塔や宝篋印塔などの供養塔も、これらの墓地に係るものと思われる。

鎌倉時代を過ぎると、熊野別当の勢力が衰退するが、熊野三山の上位の役僧である宮崎氏が東仙寺を修理し、新宮城の二ノ丸である現在の正明保育園付近を居館としたとある。戦国時代になると堀内氏の力が台頭し、戦国時代末には丹鶴山に城を築き、麓に城下町形成を行ったとの説も伝わる。

近世には、関ヶ原の戦いの後、紀州藩主となった浅野幸長の重臣である浅野忠吉が慶長6年（1601）に新宮城の築城を開始した。元和元年（1615）に一国一城令により廃城となるが、元和4年（1618）に再び築城が認められる。しかし、元和5年（1619）に幸長が広島に転封になるのに伴い、忠吉は備後三原城へ移る。紀州藩主には徳川頼宣がなり、新宮城には付家老である水野重仲が入り築城を続け、寛永10年（1633）頃に完成したとされる。城下町も江戸時代の初期には、幕末に近い町割りとなっていたことが絵図などから窺うことができる。

3. 調査の成果

調査では、大別すると3つの遺構面が確認されている。第1遺構面は江戸時代、第2遺構面は古墳時代と鎌倉時代～室町時代、第3遺構面は縄文時代中期である。以下では、第1遺構面及び第2遺構面の調査状況、特に川湊と想定される遺構を確認した中世期を中心に報告する。第3遺構面と第2遺構面の古墳時代については、今回の報告では割愛する。

①第1遺構面（江戸時代）

新宮城下町に関連する2本の道路と武家の屋敷地を確認した。

道路は、調査地中央と西側で確認されており、いずれも南北方向に延びる。絵図に拠ると江戸時代には、中央の道路が「河原町通」、西側の道路が「竹矢町通」と呼ばれていた。道路面は堀割状に屋敷地より低く構築され、道路幅は「河原町通」が約5m、「竹矢町通」が約3mである。道路端には石組みの排水溝が設けられている。

屋敷地は2つの道路の東西で数区画確認している。屋敷地を区画する石垣は花崗斑岩で築かれ、積み方から江戸時代初期（浅野期）に構築されたと想定されるものもある。屋敷の区画は江戸時代に描かれた絵図に対応する形で確認されており、絵図の正確性を証明する。石垣は場所によって積み方が異なっており、改修を行いつつも江戸時代初期の構築当初からの原位置に遺存していることが窺え、新宮城築城とともに城下町の整備も進められたことがわかる。屋敷地内の遺構としては、屋敷地入口の石段のほか、石組土坑・埋甕・埋桶・集石遺構などがある。ただ建物の礎石等は見つかっておらず、建物プランは明らかではない。

熊野川に近い調査地北側では、敷地を区画する石垣と方形石組遺構が見つかっている。石垣は前面に犬走りが設けられ、大きな石材を用いて積まれており、重厚である。川に近いことから洪水等に備えて、しっかりとした構造で築かれたと思われる。

方形石組遺構は、約3m四方？（南側未検出）に2段積みされている。燈明台の基礎部分の可能性はある。

遺物は、近世陶磁器類や銭貨、鏡などが出土している。



写真1 道路跡〔河原町通〕（南から）



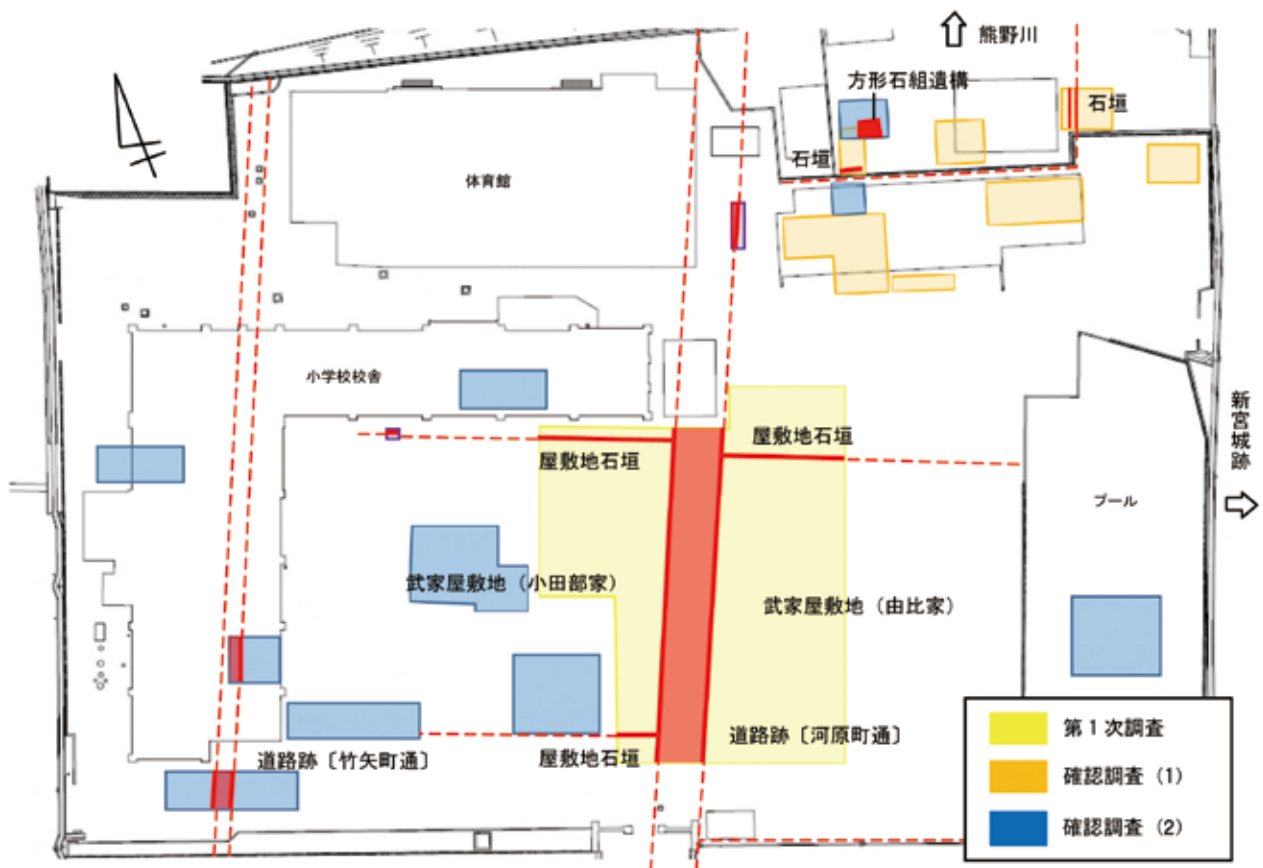
写真2 道路跡〔竹矢町通〕（北から）



写真3 武家屋敷地石垣（北西から）



写真4 方形石組遺構（北から）



第2図 第1遺構面（江戸時代）の主な遺構分布図

②第2遺構面（鎌倉時代～室町時代）

鎌倉～室町時代にかけての多数の遺構が重複して存在する。検出した遺構は、掘立柱建物跡、地下式倉庫跡、大型土坑列、石階段、鍛冶遺構等がある。

掘立柱建物跡は、複数棟が重なるように確認されている。調査区の南側に集中しており、鎌倉～室町時代にかけて同じ位置で何度も建て替えられたことが窺える。6間×4間の規模のものもあり、当時としては大規模な建物である。柱穴の直径は30～50cmで、基本的に底には据石を置いている。

地下式倉庫跡は、大別すると「方形竪穴建物」と「石組地下式建物」の2つのタイプが見られる。いずれも類例からは倉庫跡と想定される。

方形竪穴建物は、さらに分類でき、素掘りの方形竪穴の底面に石を並べるタイプと柱穴をもつタイプがある。石を並べるタイプは、四方に川原石が並び、鎌倉で確認されている類例からは、石の上に根太を置いて柱を組む構造（土台建て建物）が想定できる。柱穴をもつタイプの上屋構造は掘立柱建物が想定できる。こちらは博多等で類例が見られる。いずれも類例からは、13～14世紀が想定される。

石組地下式建物は本体部と一段浅い突出部からなり、壁を石積みしたものである。本体部分は突出部に比べて、一段低い。底面や石積み壁面などには、黄橙色の粘土が貼られている。15～16世紀と想定される。

大型土坑列は、直径1～2m、深さ1.5～2.5mの大型土坑が南北に並ぶ。東西方向への拡がりはない。柱の痕跡が見られ、大規模な構造物が存在したことを窺わせるが、詳細は不明。土坑の一つからは鏡が出土しており、地鎮に用いられた可能性もある。

石階段と道路は、川に近い調査地北側で確認されており、川へと向かって下っている。道路は何段階かの構築が見られ、道路脇に石垣が築かれた時期もある。また、道路に直交する東西方向にも石垣が築かれ、敷地境となっている。川に向かいレベルをさげながら、段々の敷地が形成されている。15～16世紀と想定される。

段々に形成された敷地では、鍛冶遺構が確認されている。小規模な炉跡が複数確認された。調査地全体をみれば、鉄滓や鞴の羽口、坩堝、鋳型なども出土しており、鍛冶が行われていたことがわかる。

これらの検出された遺構から、鎌倉～室町時代の当遺跡の性格としては、川湊が想定される。当地は、熊野川河口から約2km遡った位置にあり、丹鶴山の麓という立地も川湊に適している。

確認された石段を伴う道路は、船着場（川原）へと下りるもので、鍛冶場では舟釘等が作られ、船の修繕に用いられた可能性があり、さらに想像を膨らませれば付近で造船が行われていた可能性もある。調査地中央の地下式倉庫には交易品が収蔵され、南側の掘立柱建物は湊を管理する施設であった可能性が高い。川湊に関係する様々な機能をもった施設が一体となって確認されたことで、中世川湊の姿を復元することができる。

出土遺物としては、土師器、常滑焼、備前焼、中国製陶磁器等が出土している。土師器皿は南伊勢系のものが多く、陶磁器も東海地方（常滑、瀬戸等）のものが多い。一方、数は少ないが備前焼等の瀬戸内地方の陶磁器も出土しており、東西の交易を窺うことができる。また、中国製の白磁、青磁等の高級陶磁器も多く出土している。



写真5 掘立柱建物跡群（南から）



写真6 石組地下式建物（北東から）



写真7 方形竪穴建物〔土台建て〕（北から）



写真8 方形竪穴建物〔掘立柱〕（南から）



写真9 大型土坑列（北から）



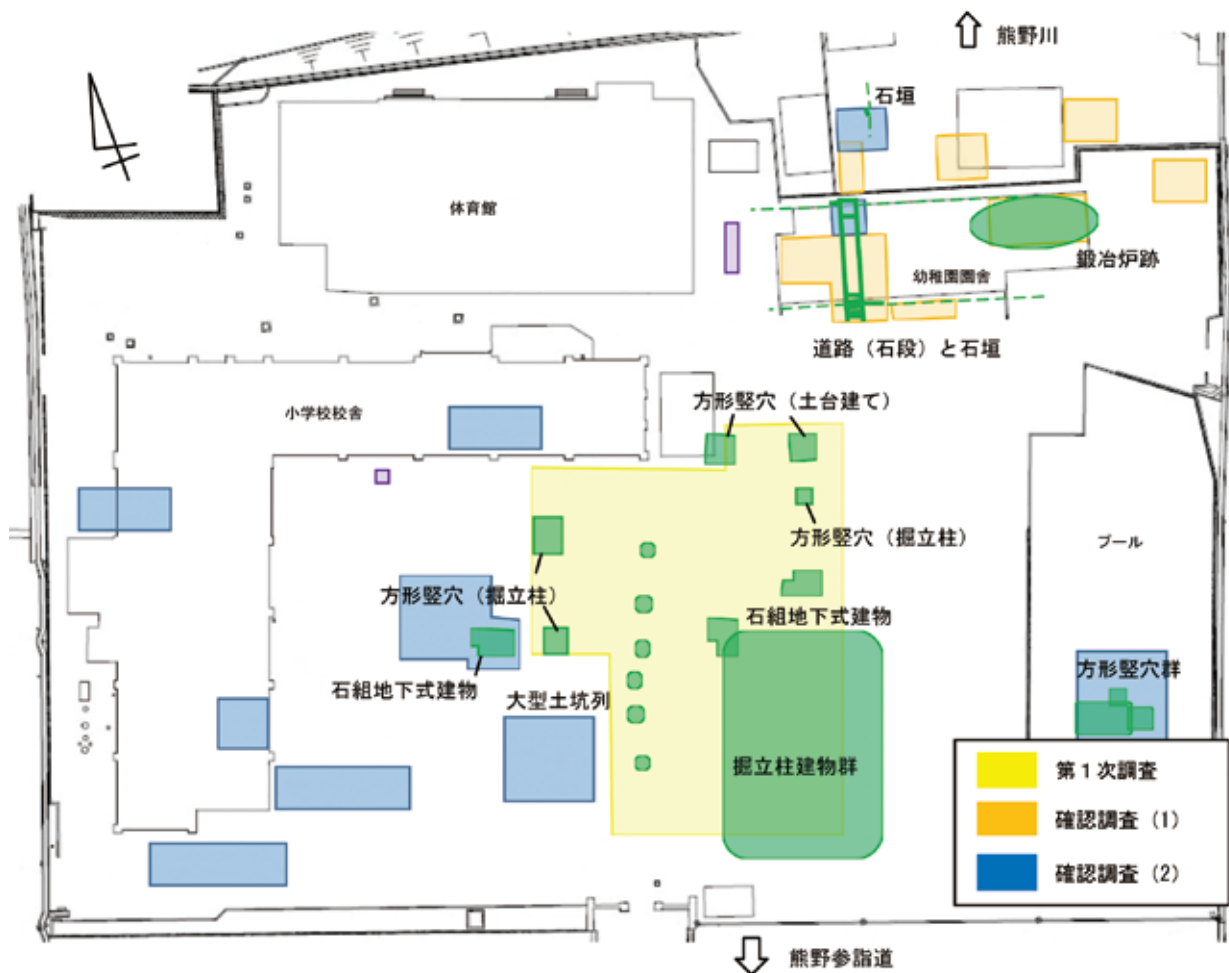
写真10 鍛冶遺構（西から）



写真11 石垣と道路（北西から）



写真12 石段と道路（北から）



第3図 第2遺構面（鎌倉～室町時代）の主な遺構分布図

4. まとめ

第1遺構面では、城下町の道路や石垣が確認され、屋敷地の規模や江戸時代初期からの新宮城下町の街路状況を窺うことができる。熊野川沿いで調達できる花崗斑岩をふんだんに使用し、城内と変わらない様な重厚な石垣を築いているのが大きな特徴で、新宮城下町の風景を現在に伝えてくれている。

第2遺構面では、中世期の川湊跡が確認された。掘立柱建物や地下式倉庫、石垣、石段といった川湊に関係する遺構が一体となり検出されたことで、各施設の配置等がわかり、川湊の構造が明らかとなった。中世新宮の湊について、文献では、『三河国碧海荘の御供米に関する文書』（永仁3年（1296））に「新宮津」の名が見られる。湊の存在を記した唯一の記録であるが、今回の調査により歴史の中に埋もれていた川湊「新宮津」の存在が確実となった。調査地の西側には熊野速玉大社があり、熊野川の上流には熊野本宮大社も存在する。いずれの大社も全国に荘園を保持しており、各地の荘園から物資が運ばれてきており、「新宮津」はその拠点となっていた可能性がある。中国製の高級な陶磁器も多く出土することから、湊の管理者としては熊野三山に關係する宗教勢力や戦国大名堀内氏等の有力者が想定される。

東西日本の間に張り出した紀伊半島の先端部に位置する湊であり、鎌倉や博多といった東西それぞれの要素を持つ遺構や遺物が確認されていることから、海上交易の拠点としての要素も窺え、中世の太平洋沿岸における海上交通、交易について改めて考えさせてくれる発見となった。

太田城水攻め関連遺構について

—友田町遺跡第7・10次発掘調査—

公益財団法人和歌山市文化スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター 菊井佳弥

太田城水攻めは天正13（1585）年、羽柴秀吉の紀州攻めの最終段階におこなわれ、日本三大水攻めの一つとして知られる。三尾功氏の研究によれば、水攻め堤は紀ノ川田井ノ瀬から出水を通り、中黒田、吉田、総光寺、日前宮北部を通り、音浦山に至る全長5.8km、3月26日から4月5日までの短期間に延べ16万9200人の和泉・紀州の百姓を動員し、築堤されたとされる。田中敬忠氏に調査によれば、昭和初期まで20カ所の堤防跡が残っていたとされるが、現在は一部が出水に残存するのみである。太田城水攻めは和歌山における中世と近世を分ける歴史的な転換点として注目されている。

太田城や水攻め堤の位置や構造は発掘調査成果や明治時代の地籍図から検討されてきた。太田城は発掘調査例が比較的多く、位置が特定され、環濠の構造が明らかにされつつある。一方、水攻め堤は和歌山井堰研究会が和歌山市出水に残存する水攻め堤の測量と一部断面調査を実施したのみで、三尾氏の想定した水攻め堤のライン上にある出水堤を中心とする太田城水攻め堤跡のほか、太田・黒田遺跡、友田町遺跡、秋月遺跡、鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡、音浦遺跡ではこれまで多くの発掘調査が実施されているが、太田城水攻めに関連する遺構は確認されていない（図1）。三尾氏の想定した水攻め堤の隣接地でおこなった友田町遺跡第7次調査（平成26年度調査）と第10次調査（平成28年度調査）で、人為的に埋め戻された大規模な土取り穴を検出し、水攻め堤に用いた土の採取跡が明らかになった（図2）。

友田町遺跡は縄文時代後期から現代までの層位が確認されているが、第7・10次調査では、近世耕作土の下は異なり、縄文時代後期から中世の堆積がなく、土取り穴の埋土である自然堆積層を間に挟む上下2層のブロック土を検出できる。ブロック土の下面では縄文時代中期末から後期初頭の自然堆積層を基盤とする土木具による掘削痕跡が良好に遺存する。

土取り穴は深さ0.8～1.5m、明瞭に残る掘削痕跡は作業方向や掘削深が一樣ではなく、規則性はない。ただし、掘削痕跡が列状に並び、掘削深度が大きく変わるような箇所があり、そこは担当が異なる作業範囲境であった可能性がある。第7次調査では幅0.5～2.5mで帯状に掘り残された部分があり、作業道の可能性がある。基盤が砂層でも掘削痕跡が明瞭に残るため、掘削直後埋め戻され、調査地付近は掘削痕跡を残す程度の堅さの地盤で、水が激しく湧くような土地でなかったことが窺える。

土取り穴の埋土は3層に分層でき、下層は土取り時の残土、中層は土取りによってできた凹みに自然に堆積した土、上層は凹みを人為的に埋めた盛土である（図3）。

下層の残土は、厚さが一樣ではなく、堆積がない箇所、土取りで掘削された土が高さ5～10cm、幅40cmの畝状に残された部分や深さ20～30cm程度、凹みを埋め、平たく均している箇所がある。出土遺物に志野焼の細片1点があり、中世末の堆積と言える。

中層の自然堆積層は軟質で上面には上層からの踏み込みが多数みられ、上面が北西から南東へやや低くなる傾斜を持つ。厚さが20～50cmがあり、さらに3層に細分でき、上から自然堆積層1

～3と呼称する。自然堆積層1～2は粘土質シルトで、自然堆積層3は中砂～粘土質シルトである。自然堆積層1は東側が厚さ40～50cmと厚く、西側が厚さ20cmと薄い。自然堆積層2・3は自然堆積層1が厚く堆積する東側に部分的に堆積し、厚さは自然堆積層2が5～10cm、自然堆積層3が1～10cm程度である。自然堆積層3は人為的作用が加わって引き起こされた洪水による堆積の可能性があり、自然堆積層2と自然堆積層1の下位にはヒシが多く含まれていた。洪水後、滞水環境となり、ヒシが群生していたと思われる。自然堆積層1の下位と自然堆積層2・3には地震による変形がみられた。地震による変形は自然堆積層1下位より下層で見られることから、地震は自然堆積層1の堆積時に起こったと考える。自然堆積層1からは瀬戸天目茶碗の細片、鬼瓦、銅製木柄、漆碗、木製下駄が出土している。このことから自然堆積層1は中世末から17世紀後半までの堆積であり、この期間に発生した大地震として慶長9（1604）年12月16日に発生した慶長南海地震があげられる。

上層の盛土は厚さ約0.5mで、調査地周辺に存在したであろう中世から縄文時代後期の堆積層のブロックにより構成される。盛土の断面では一定量の土が北から南へ順々に盛られた様子が観察できる。出土遺物に17世紀中～後半の陶磁器2片があることから上層の盛土は江戸時代前期と考えられるが、上層に存在する近世の耕作時の混入物である可能性も捨てきれず、今後周辺調査成果等を参考に検討していく必要がある。

第10次調査では、掘削時の残土やその後堆積した自然堆積層にも中世末の遺物を含むことから、検出した土取り穴は中世末に掘削され、ヒシが生える池となっていた後、江戸時代に入って埋め戻され、耕作地に転用されたことがわかった。調査地が天正13（1585）年4月に攻め落とされた太田城水攻めの堤跡推定地に隣接し、大規模に土取りがおこなわれた時期が太田城水攻めの時期と齟齬がないので、検出した土取り穴は水攻めの築堤に伴うものと判断した。また、土取り穴の形状や土取り後の整形、堤の構造等を考慮すると、第10次調査で検出した土取り穴は排水施設としての機能を有していた可能性がある。土取り穴に堆積した人為的作用による洪水砂（自然堆積層3）は、水攻めに伴う堆積であり、土取り穴の上層を埋め立てた土も水攻め堤体を取り崩した土を用いたと考える。

土取り穴の規模は第7・10次調査の成果から幅20m以上、長さ100m以上にわたることが明らかになっている（図2）。第10次調査と第7次調査では掘削深が大きく異なることから、土取り穴の掘削深や幅は各地点で異なると考えられるが、第10次調査区付近では現存する地割から土取り穴の幅が約80mに復元でき、土取り穴の平均の深さを1.15mとして算出した土量と出水堤の規模から推定できる土量がほぼ一致することからも蓋然性が高い。

友田町遺跡の調査成果を受けて、大木要氏が過去の発掘調査成果の再検討をおこなった結果、太田・黒田遺跡第57次調査、秋月遺跡第9次調査、平成20年の出水堤の立会調査でも友田町遺跡と同様の土取り穴が存在することが明らかになった。水攻め堤の周囲には大規模な土取り穴が存在し、今は遺存しない水攻め堤の位置を土取り穴から復元できる可能性がある。土取り穴の調査を全面的におこなえば、堤の位置の確定、堤本体の構造を考える上で重要な堤に用いられた土の質や量、作業通路や作業単位等の築堤工程を復元できると考える。

[参考文献]

大木要・菊井佳弥「太田城水攻め関連遺構について－友田町遺跡第10次発掘調査成果を中心に－」
『研究紀要第31号』和歌山市立博物館 2016



図1 水攻め堤推定地と

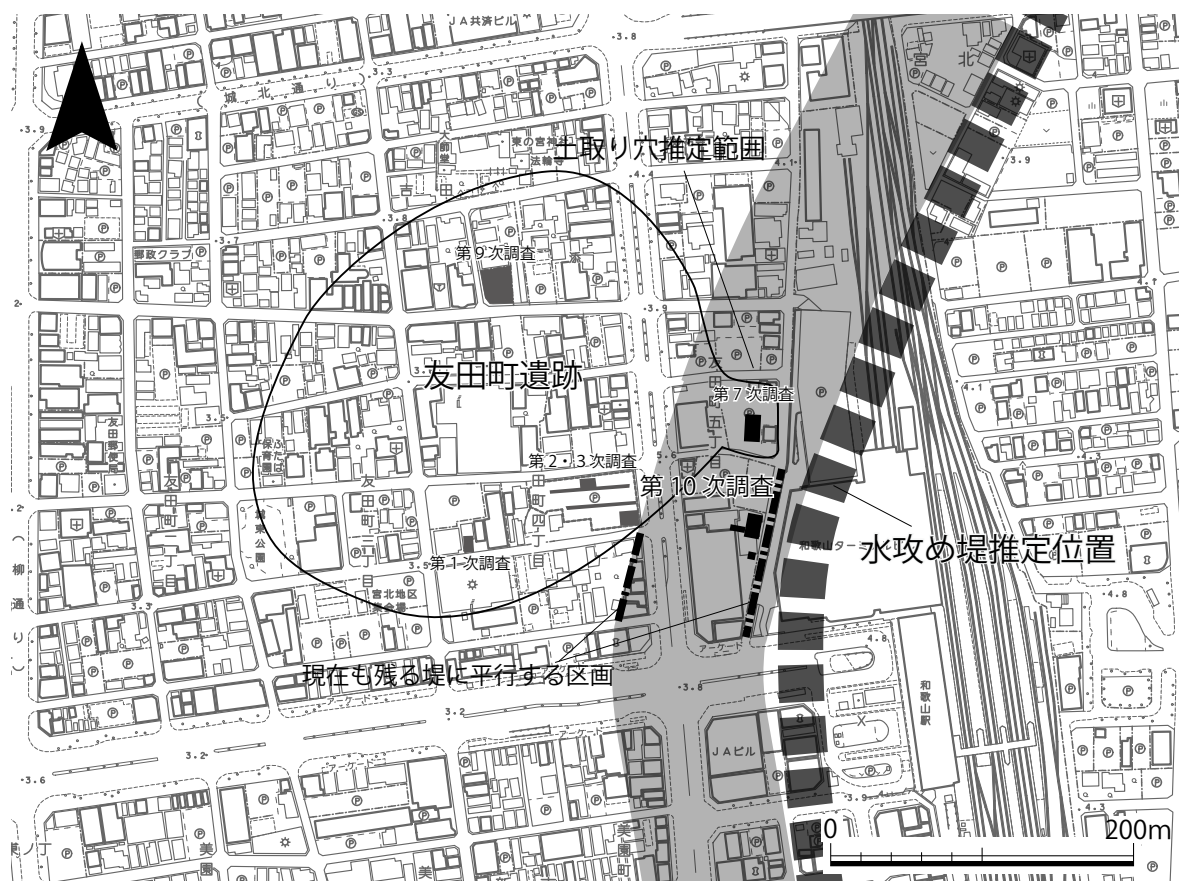


図2 調査地位置図

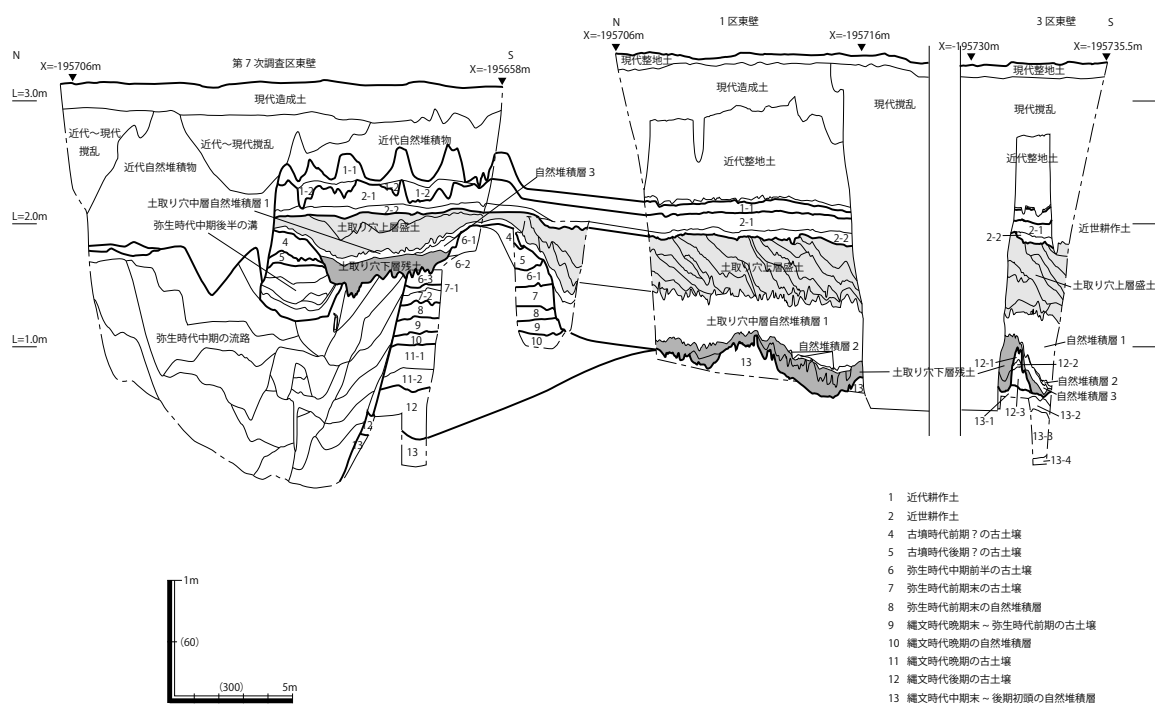


図3 調査区断面図



土取り穴土層断面



土取り穴掘削痕検出状況

—吉原遺跡の発掘調査—

1. はじめに

地形的には、大半を県下2番目の広さをもつ日高平野が占め、町の西半は日ノ山（標高 201.6 m）、西山（標高 328.7 m）を含む白馬山塊及びその先端が海に没する切り立った岩石海岸から成る一方、東半は北東に入山（標高 76 ～ 78 m）等の低山地が位置する。

吉原遺跡は、こうした新旧2列の旧海岸砂丘上にまたがって立地しており、東西約500 m、南北約120 mの範囲に広がる。

今回の発掘調査地は、吉原遺跡の最も南東に位置し、総面積は 406.2m²である。



【美浜町】10. 吉原遺跡 7. 和田古墳群 8. 和田1遺跡 9. 和田II遺跡 12. 松原経家 13. 堂の前西沼遺跡 14. 吉原御坊跡 15. 田井遺跡 16. 西川遺跡
 堀4. 松原王子神社の社跡 【磐田市】28. 磐田遺跡 40. 善明寺遺跡 41. 小竹和歌古墳 堀1. 日高別院の公孫樹

図1 吉原遺跡の位置図

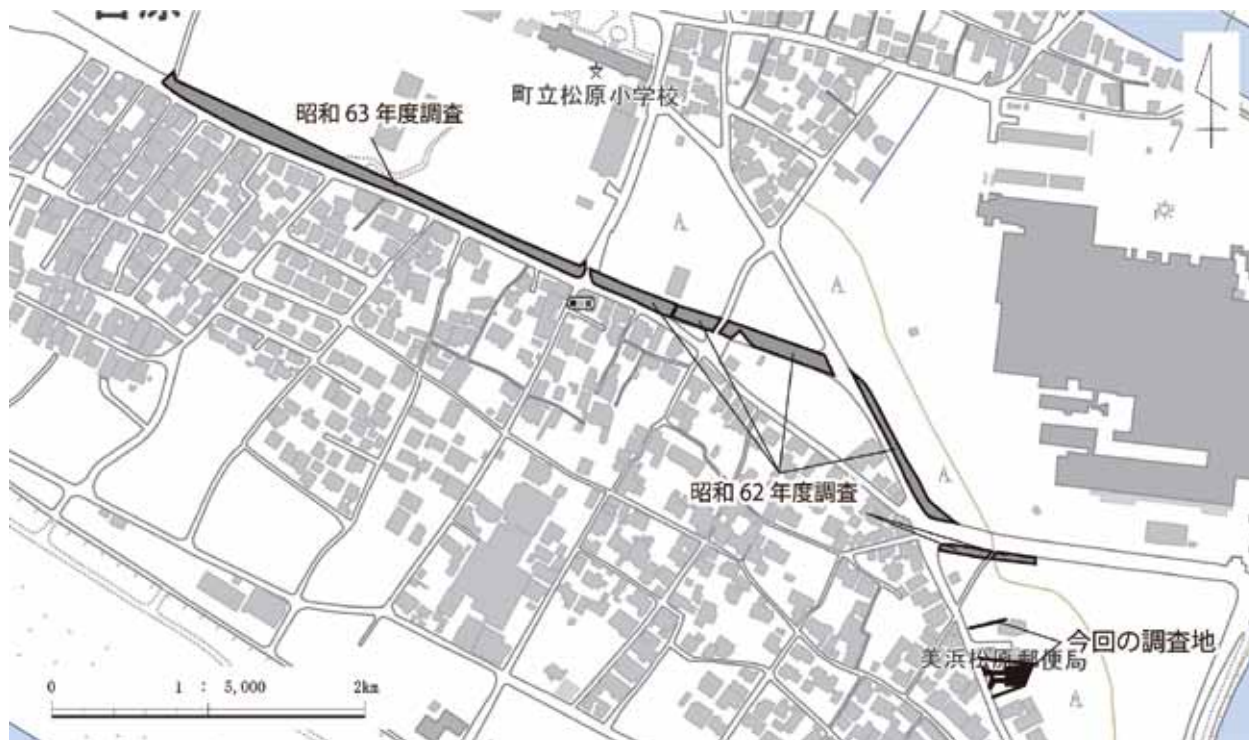


図2 今回の発掘調査及び既往の調査位置図

2. これまでの調査成果

吉原遺跡では、今回の発掘調査地より北側で、昭和62年度及び昭和63年度に財団法人和歌山県文化財センターにより県道柏・御坊線改良工事に伴う発掘調査が実施された。調査面積は延べ3,300㎡である。調査の結果、弥生時代中期前葉から古墳時代前期、奈良時代、平安時代などの土壙墓、弥生時代中期前葉から庄内期などの方形周溝墓、時期不明の溝状遺構、小穴、その他不明遺構などが確認され、調査地は弥生時代から平安時代にかけて長期間にわたり墓域として利用されたことが判明した。また、今回の発掘調査以前には、当該発掘調査対象地にて和歌山県教育委員会により試掘確認調査が実施され、中世とみられる火葬墓が確認された。

3. 今回の発掘調査成果

今回の発掘調査対象地は4箇所に分かれており、最も面積が広い調査区を4区、その他は北から1～3区とした。現状はいずれも西側の海風を防ぐために植えられた松林であり、一部で旧海岸砂丘の砂が露出していた。

調査の結果、奈良時代～平安時代の土坑9基、中世以前の列石状遺構1基、中近世の火葬墓24基・土坑1基、時期不明のピット3基を検出した。ただし、3・4区で検出された奈良時代～平安時代の土坑は、一部でレンガ片のような細片が出土していることから、調査地東側にある江戸時代に掘削された新川の排土である可能性も完全には否定できない。

中世以前の列石状遺構は、4区で中近世の火葬墓・土坑を検出した遺構面より1.0m程度下層で確認された。列石状遺構の規模は、溝も含めると長さ約4.0m、幅約3.0mである。列石は一列で、長さ20cm程度の扁平な砂岩を3段小口積みで積み上げている。周囲にめぐる溝は、幅0.4m、深さ0.2m程度で、列石の中央には落ち込みが認められるものの、埋土から遺物等の出土はなく、この遺構の時期や性格についてはよくわからない。



4区 全景（西から）

火葬墓は、すべての調査区で確認され、広範囲に分布することがわかった。調査区が狭く、火葬墓の全形がわかるものは少ないが、規模は長さ0.8～1.2m、幅1.2m～2.1m程度とみられ、深さ0.4mと残存状況は良好であった。平面形は、主に円形又は楕円形がみられる。ほぼ全ての火葬墓の埋土は、灰を含む黒褐色を呈し、そこから焼けた人骨片や鉄釘が多く出土した。火葬墓によっては、埋土より焼けた人骨片等に加えて、土師器小皿、古寛永銭、木片が認められるものもあった。いずれの火葬墓も、墓坑壁に火を受けて焼け固まった状況は見受けられないことから、各遺構で茶毘に付されたものではなく、他所で茶毘に付された人骨等が埋納されたものと考えられる。

一方で、火葬土坑は土坑壁が赤く焼け固まっている状況がみとれ、この遺構では亡くなった人が茶毘に付され、そのまま墓として利用されたものと想定される。

また、これら火葬墓・火葬土坑から出土した人骨の部位同定を依頼したところ、被葬者の年齢や性別を明確にするには至らなかったが、火葬土坑でのみ軸椎（喉仏）が出土していることが判明した。全形を確認できた火葬墓が少ないことから断定はできないが、軸椎（喉仏）の有無はこうした利用状況の差異を反映するのかもしれない。



4区 列石状遺構（北西から）



4区 火葬墓土層断面（西から）



4区 火葬土坑土層断面（西から）

4. まとめ

吉原遺跡では、これまでの調査により今回の発掘調査地北側は弥生時代から平安時代の墓域であったことが判明している。今回の調査により、それ以降である中世から近世においても、立地を海側へ移動させながら引き続き墓域として利用されていたことが新たに判明した。

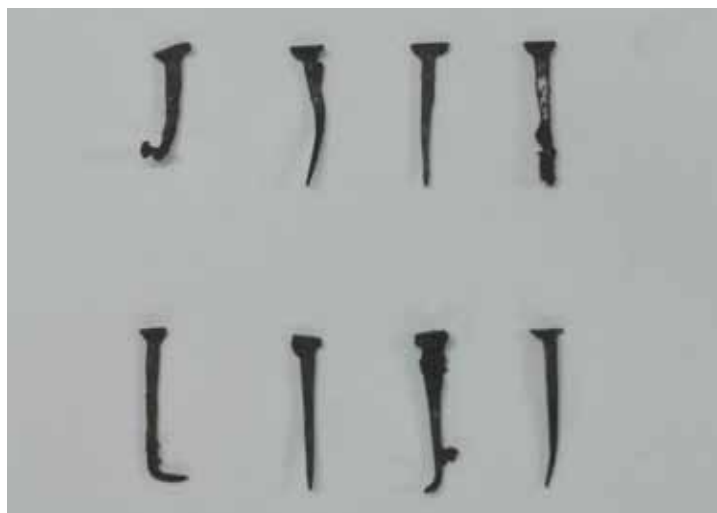
なかでも、平安時代から近世にかけて確認されている墓がすべて火葬墓である点は注目される。しかしながら、こうした火葬墓を当該地域で行っていた背景は定かではない。近畿他地域の事例を参考とするならば、墓域選定にあたっては平安時代とみられる松原経塚の造営を契機として、当該地域周辺が聖地化され、墓域として利用された可能性が想定されるにとどまる。また、火葬が採用された背景としては、当地域周辺の小松原Ⅱ遺跡・湯川氏館跡にて13世紀中頃から後半には浄土宗（系）の寺の存在が窺われることや南北朝時代である興国4年1月13日の原本を文明5年6月8日に写した西円寺名帳に「〈ヨシハラノ〉ヨネ女」「〈ヨシハラノ〉ヒコ九郎」とみえることから、当地に初期真宗門徒がいたことが知れるなど、仏教宗派が一因と想定される。



4区 火葬墓・火葬土坑出土土師器小皿



4区 火葬墓出土古寛永銭



4区 火葬墓出土鉄釘



4区 火葬墓出土人骨

立野遺跡と仮庵山経塚群の出土品

—新規県指定文化財の紹介—

和歌山県教育委員会 丹野 拓

1. はじめに

平成 29 年 3 月 17 日、すさみ町の^{たちの}立野遺跡出土品と田辺市の^{かりほやま}仮庵山経塚群出土品が和歌山県の県指定文化財となった。

立野遺跡出土品は、弥生時代が始まる時期の流路でみつかった木製品・石器・土器の一括資料で、地域の特徴的な木材・石材を用いて各種の製品が作られている。

仮庵山経塚群出土品は田辺市闘鶏神社の裏山にある鎌倉時代の経塚群でみつかった多様な埋納品が揃った貴重な資料である。

これらの出土品について、和歌山県教育委員会が指定のために調査した成果を調査担当者を代表して紹介したい。また、立野遺跡の木製品のうち若干数を、写真を添えて解説したいと思う。



図1 立野遺跡と仮庵山経塚群の位置

2. 立野遺跡出土品

(1) 概要・出土状況

立野遺跡は西牟婁郡すさみ町周参見に所在する谷底低地の遺跡で、周辺は山地に囲まれている。平成 22 年度に近畿自動車道紀勢線工事に伴い（公財）和歌山県文化財センターによる発掘調査が行われ、自然流路を利用した遺構 302 から、多量の自然木・木屑・葉・木の実等とともに多量の木製品・石器・土器が出土した。木製品は未成品・原材を含み、石器は木製品の加工道具が多い特徴がみられた。木製品・石器とともに出土した土器の年代から、これらの遺物は弥生時代前期（紀元前 5 世紀頃）の一括資料であることが分かった。

この流路は、幅 15 m 以上、深さ 1.2 ～ 1.5 m で、3 段階に堆積している。遺物の大半は流路の下層（第 3 層）から出土している。中層（第 2 層）は地山崩壊に伴う土で一気に埋まっており、その後に上層（第 1 層）で流路が完全に埋まっている。



写真1 立野遺跡木材・木製品出土状況

下層からは弥生時代前期中段階の土器のみが出土し、中層からは中段階と新段階の土器の両方が出土した。この出土状況から、木製品の一群は弥生時代前期中段階に製作された一括性の高い遺物であり、学術的にも非常に貴重な価値をもっている。

今回指定された立野遺跡出土品は、流路下層（遺構 302 第 3 層）一括出土資料のうち、報告書に掲載された木製品 172 点・石製品 155 点・土器 205 点の計 532 点である。

(2) 資料の内訳

<木製品>

・工具	6 点	(斧 ^{ひざえ} 膝柄・斧 ^{なおえ} 直柄・楔状木製品)
・農具	53 点	(平鍬・広鍬・泥除 ^{どろよけ} ・刈払具・竪杵)
・狩猟具	9 点	(弓・矢)
・食事具	7 点	(匙・竪杓子)
・容器	46 点	(舟形・鉢・浅鉢状・皿状)
・建築部材	22 点	(梯子・柱材・垂木ほか)
・木材	23 点	(丸太材・半裁材・割材・板材ほか)
・その他	6 点	(琴状木製品・俎板状木製品・機織 ^{はたおり} の経送具 ^{たておくりぐ} ほか)

<石器>

・磨製石斧	15 点	(頁岩製、鑿状・扁平、製品・未成品あり)
・打製石斧	13 点	(頁岩製、鍬状の大型品あり)
・楔形石器	32 点	(頁岩製、台形・長方形等、出土点数多く木製品加工用か)
・石核	6 点	(頁岩製)
・削器・刃器	54 点	(頁岩製、楔形石器と類似品多数、出土点数多く木製品加工用か)
・石鏃	3 点	(サヌカイト製、打製、出土点数少ない)
・叩石	22 点	(砂岩製、点数多い、調理具か)
・ハンマー	1 点	(緑色片岩製)
・石皿	6 点	(砂岩製、調理具か)
・石棒	3 点	(緑色片岩製)

<土器>

・弥生土器	43 点	(壺が多量、甕底部とみられるものあり)
・突帯文土器	155 点	(深鉢多量、鉢・壺少量)
・条痕文土器	7 点	(壺多数、甕少数)

(3) 資料の特徴

木製品には温暖な紀伊半島に特徴的なイスノキ・クスノキを用いた資料がある。イスノキの板目材を用いて製作した平鍬は、地域の独自性の強い素材を用いた製作工程のわかる資料群で、弥生時代中期以降に各地でみられる曲柄平鍬と形状が類似する点も注目される。

クスノキを用いて製作された容器は種類が豊富であり、それぞれ原材とみられる資料が揃う点も価値が高い。これらの樹種を用いた製作工程資料は類例がなく、全国的な木製品の系譜上での位置づけは難しいが、地域別の発展状況を反映するものと考えられ、今後の周辺地域での類例の

発見が期待される。

鋤の製作工程資料は独自性の強い板目材のものと全国的な系譜上にある柂目材のものの両方がみられる。これらの製作工程資料から、全国との繋がりをもちつつ、地域での独自発展をとげた木製品の製作状況がうかがえる。

そのほか、琴の未成品とみられる資料や機織りの経送具片、完全な形で残る漆塗りの弓といった貴重な資料の存在も注目される。

石器は石錐や石包丁が含まれず、石鏃の出土点数も一般的な集落と比べて極端に少ない。また、伐採斧がなく、加工斧が多量にあり、削器・刃器・楔形石器の出土量も非常に多いことから、立野遺跡は木製品加工場の遺跡であると考えられる。

周辺で実施された発掘調査では、弥生時代の木製品が多量に出土することはなく、遺構 302 は弥生時代前期の木製品加工場が災害等による地山崩壊を起こして埋没した地点を、偶然調査した稀有な例といえる。

土器は弥生時代前期中段階の資料で、和歌山県下で最古段階の弥生土器である。弥生土器の壺と突帯文土器深鉢がおよそ 1 : 9 の比率で出土しており、それ以外の土器は少ない。弥生土器壺は遠賀川系の壺であるが、通常伴うべき甕・鉢・高坏などの器種が伴わないため、弥生文化を受容する際に、突帯文土器と器種の峻別をおこなっているものとみられる。また、東海系の条痕文土器をはじめ、他地域からの搬入土器が少量出土しており、海を通じて活発な東西交流を行っていた状況がうかがえる。

以上のことから、立野遺跡出土品は、弥生時代前期の木製品・石器・土器からなる一括資料であり、紀南地域に特徴的な木材や石材を使用して、木製品の製作を行った状況を示す貴重な資料群であると評価できる。

3. 注目される木製品の紹介

(1) イスノキで作られた平鋤

立野遺跡では、温暖な地で育つイスノキを利用した農具が作られている。イスノキはカシノキ同様に堅い木材として知られるが、材にくせがあり、あまり用いられない。

右の写真はイスノキの平鋤（あるいは狭鋤）の製作工程資料であり、左側の木材を切り出したものを粗割りし、形を整え、最後に柄の先に軸頭を削り出して製品に仕上げている。イスノキで製作したのは平鋤の身だけであり、身が多数出土するのに対して組み合う柄は出土していない。



写真2 イスノキ製平鋤製作工程資料

これらは径 20 ～ 40cm 程のイスノキの板目材を用いており、現状では黒色を呈している。原材から製品まで、各工程の資料が揃っており、全長約 45cm、軸部長 18 ～ 23cm、刃部幅約 8 ～ 10cm、厚さ 2 ～ 3 cm 程度のものが多数を占めている。軸部・刃部は柄の装着面側が平坦で、背面が若干丸みを帯びる。軸頭は明瞭なものとやや曖昧なものがあるが、すべての製品で削り出されている。

一方、全長 50cm以上の大型品や細長い形状をした製品では軸頭は確認できず、鋤などの用途をもった製品である可能性もある。その他、軸部装着面が平坦になっていないものや薄手で強度のないものなど、製品としての使用に疑問がもたれるものも含まれている。

(2) 柁目材の広鋤と板目材の広鋤

広鋤は通常、アカガシの柁目材を用いたものが多いが、立野遺跡では多くがイチイガシを用いて作られており、柁目材の製品と板目材の原材料・未成品・製品がある。

出土している製品・未成品では、柁目材のものが厚さ約 6 ～ 8 mm と薄く（写真 3 右）、板目材のものは厚さ約 2 cm と厚い（写真 3 中央）。

板目取りの原材料は長さ 60cm、幅 29cm、最大厚約 10cm あり、柄を差し込む舟形突起を作るために削り残した部分の上面に樹皮が残存している（写真 3 左）。



写真 3-1 カシ類の広鋤未成品と製品

(3) 弓矢

狩猟具（あるいは武器）として、弓が出土している。イヌガヤの芯持ち丸木ないし削り出し材を用いており、完成品は樹皮製の蔓を巻き付け、全面に漆塗りを施している。完形で出土した製品は長さ 125cm、直径は 2 ～ 3 cm 程で、一端がやや尖り、別の一端は弦をかける切り込みを設ける。現状での外面側に棒樋とみられる沈線がある。また、ヒサカキ製の矢が 1 本出土している点も注目される。

縄文系の弓矢の事例として滋賀里遺跡例と並ぶ優品であり、全国的にみても非常に貴重な資料である。



写真 4 イヌガヤ製の弓

(4) クスノキで作られた多様な容器

立野遺跡では、クスノキ製の多様な容器が出土している。ボウル状の容器は口縁部に沈線がまわり、底部が若干突出する。高台付きの容器は、深い鉢形を呈するものと考えられる。浅鉢形の容器は楕円形をしており、出土した際に底部に二つの孔が観察されており、他の容器とは異なる使用法を考える必要もあるだろう。大皿形容器は楕円形をしており、大きいもので長辺 50 ～ 60cm、短辺 40 ～ 50cm、深さ 8 ～ 10cm である。

立野遺跡の土器は壺や甕（深鉢）が圧倒的に多く、浅鉢や高坏

が欠けている器種構成であり、これらの容器は土器の鉢や高坏を補完する製品と考えることもできる。

(5) 舟形容器の製作

舟形容器はクスノキの屈曲部を利用して作られており、一端が尖った船のような形状をしている。容器として解釈しているが、祭祀具であった可能性も考えられる。

舟形容器は立野遺跡特有の器種である可能性があるが、イスノキ製の平鍬とともに、製作工程を追える良好な資料群を形成している。舟形容器に適した規格の丸太材で樹皮が残存した状態の原材から、粗割り段階のカツオブシのような形状をした未成品、容器の上面に若干の窪みを有する段階の未成品、容器として成形されているが面取り痕が明瞭な厚手の未成品、表面が平滑な薄手の製品といったものが確認できる。



写真5 クスノキ製舟形容器の製作工程資料

(6) その他の木製品

立野遺跡では、そのほかにも多様な木製品が出土している。

琴の未成品の可能性のある板状製品は 40 × 13 × 1.5cm の杉板を用いており、上下に突起がつくりだされている。

また、機織りに用いる経送具の破片等も出土している。



写真6 琴の未成品

立野遺跡には、縄文時代と弥生時代の特色、東日本と西日本の特色をもった多様な木製品がある。それを在地の木材で加工したため、独特な製品となっており、「木の国」を代表する木製品製作遺跡であると評価できる。

木製品にスポットを当てて紹介したが、紀南地域に特徴的な石材である頁岩で作られた各種の石器は木材加工用に用いられたとみられる一群であり、紀南地域で産出する木材を、紀南地域の石材で作った道具で加工していた遺跡として立野遺跡は地域の特徴のでた遺跡である。

立野遺跡出土品は、「木の国」の始まりの様相を示す一括資料として、和歌山県にとって非常に意味のある資料といえるだろう。

4. 仮庵山経塚群出土品

仮庵山経塚群は、田辺市東陽に所在する闘鶏神社の南側の丘陵にある3基から成る経塚群である。その出土品と周辺の採集品は鎌倉時代の遺物で、以下の計154点が県指定の考古資料となった。

(1) 資料の内訳

各経塚と周辺で採集された資料の内訳は次の通り

＜第1号経塚出土品 23点＞

鉄刀子1点、石硯1点、ガラス小玉5点、青白磁合子蓋2点、青白磁合子身1点、白磁合子1点、瓦器碗・皿破片12点

＜第2号経塚出土品 17点＞

青銅経筒1点、青白磁小壺蓋1点、青白磁小壺身1点、青白磁合子身1点、青磁碗1点、常滑焼甕1点、常滑焼甕破片11点

＜第3号経塚出土品 48点＞

瓦製経筒1点、鉄刀1点、鉄刀子2点、銭貨5点、ガラス小玉3点、青白磁小壺蓋2点、青白磁小壺身2点、青白磁合子蓋9点、青白磁合子身7点、青白磁皿1点、東播系須恵器甕破片3点、亀山焼甕破片10点、瓦器碗破片2点

＜附 経塚周辺出土品及び採集品 66点＞

ガラス小玉21点、青白磁小壺身5点、青白磁合子蓋9点、青白磁合子身17点、瓦器碗破片14点



図2 第1～3号経塚の位置

(2) 遺跡の概要

仮庵山経塚群は関雞神社社殿の背後にある標高約20mの権現山に築かれている。第1号経塚は山の中腹に、第2号・第3号経塚は山頂付近に立地している。権現山は「キンジヤマ」と呼ばれる禁足地となっており、中央の「クラガリ谷」を挟んで南北に区分される。南の社殿背後の山が「仮庵山」であり、「権現宮縁起並秘事」においては神龍が宿る山として記されている。また、仮庵山には別当が源為義の女立田姫を娶り仮庵を営んだという伝承も伝わっている。

この遺跡は、昭和33年2月に伊勢田進氏、中村活氏の踏査により発見された。その後、田辺市教育委員会及び田辺市文化財調査会は仮庵山埋蔵文化財特別調査会を設置し、昭和33年3月から5月にかけて第1号経塚、第2号経塚及び第3号経塚の発掘調査を行った。

調査と出土遺物の概要については、伊勢田氏による報告があり（伊勢田1958）、市史編纂にあたり未掲載の写真及び実測図が公表されている（伊勢田1994）。また、『関雞神社学術調査報告』にて遺物の再調査が行われ、数量、写真及び実測図が公開されている（菅原2012）。

第1号経塚は、発見時にはすでに盗掘を受け、付近に土器片及びガラス小玉が散乱した状態であったという。しかし発掘調査を実施すると、直径1.8mの範囲で拳大の円礫が環状に巡る状況が確認され、円礫2・3石の積み石が認められた。環状に巡る円礫の中央部では地表面から0.2m下に刀子及び瓦器皿が埋まっているのが確認された。また、西側の円礫内側部からは青白磁合子及び硯が出土している。

第2号経塚は、第3号経塚のある山頂から若干斜面を下りかけた地点にあり、直径1.0～1.6m、深さ0.6mの楕円形の土坑の中に割石積みの小石室を築いている。小石室は半壊しているが2枚の蓋石があり、小石室内部には外容器である常滑焼広口壺とその納入品である青銅製の経筒が出土した。そのほか小石室内からは青白磁合子、青白磁小壺が外容器と石室壁面の間に落ち込

んだ状況で出土し、小石室の割石に混じって青白磁合子などの残欠が出土している。

第3号経塚は、第2号経塚と接しており、すでに大部分は破壊されていた。直径0.9m、深さ0.4mの土坑の内部には、すでに破壊された石室の石材及び外容器とみられる甕の破片が出土している。土坑外からは多数の破片となった青白磁合子や鉄刀、鉄刀子、銭貨が出土している。

なお、第2号経塚と第3号経塚の

間にある2基のピットには木炭、焼土が充填されており、銭貨の出土が確認された。

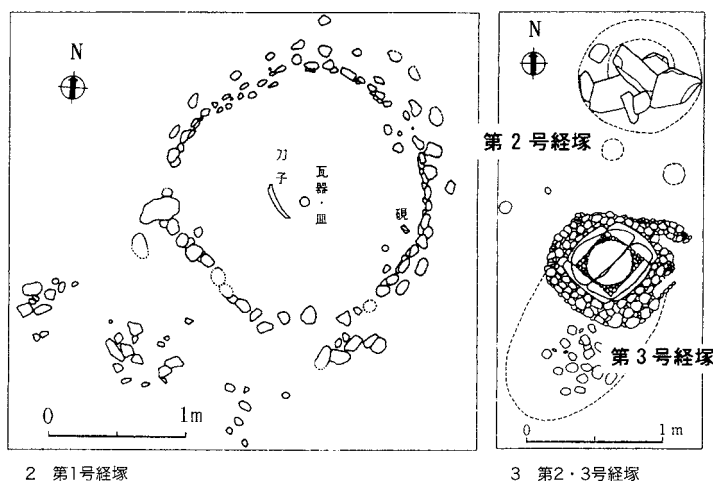


図3 第1～3号経塚平面図

(3) 出土品の概要

仮庵山経塚群出土品は、埋経に関わる経筒及び外容器をはじめとして、地鎮に伴う鉄刀、鉄刀子及び銭貨、奉養に伴う石硯、ガラス小玉、青白磁及び陶器が存在する。これらの経塚群出土品に加え、附の経塚周辺出土品及び表採品から成る一括資料である。

第1号経塚から出土した石硯は、特筆すべき資料である。粘板岩製で小型長方形の石硯であり、縦7.3cm、横4.3cmの袖硯である。石硯の四辺には額縁状に回線を施し四隅に硯花文風に張り出す刻線草葉文を配する。石硯の経塚出土例は京都市鞍馬寺経塚からの出土のみであり、当該時期での袖硯の出土例となるときわめて類例が少なく貴重なものである。

第2号経塚から出土した青銅経筒は破片で出土したが、中に筒を入れて復元している。残存身高20.1cm、直径8.3cmであり、銘文等は不明である。経筒は銅板製の円筒式平底のもので、合わせ部で幅0.7cmを10か所鉋以上止めする。底部の上には厚さ0.8cmの木板が遺存している。

外容器の常滑焼甕は器高が低く、肩が大きく張るものである。肩部及び内面には灰釉がかかり、



写真7 第1号経塚出土品



写真8 第2号経塚出土品



写真9 第3号経塚出土品

外面は赤褐色を呈する。小石室内部からは瓦製経筒片が出土しており、瓦製経筒による埋経が行われていた可能性も考えられる。

銭貨は宋銭4枚が第3号経塚から、宋銭1枚がピットから出土している。

青白磁合子は身と蓋を含めて計28点が出土しており、県内では高尾山経塚の40点に次いで多い出土となり、合子の縁部及び胴部外面に菊花文を浮かべている小型品のものと、無文の中型品に分けられる。合子蓋の上面には草花文、蓮華文、双鳳文、菊弁文、螺旋文が型抜きで表現されている。中でも口径9.3cm、器高2.9cmである双鳳文青白磁合子は優品であり、国内では東松山市利仁神社境内、沼津市香貫山、大津市横川経塚、高野町高野山奥の院から各1点出土しているのみである。この青白磁合子の産地としては、景德鎮湖田窯から類例が出土しており、12世紀後半から13世紀前半に盛行したとみられる。青白磁合子は完形品が少なく、奉養品として用いられ後に破砕された可能性がある。多くの個体は発掘者により復元が行われており、出土時には破片であったと考えられる。個体識別は慎重になされており、数量については問題ないと判断される。

(4) 経塚群の造営時期と評価

経塚の造営時期は、第2号経塚の外容器である常滑焼広口壺がその生産地編年から13世紀第2四半期と判断される。次いで第3号経塚は、青白磁製合子が多く第2号経塚からわずかに後出する時期とされる。また第1号経塚は出土瓦器碗の年代観から13世紀後半と考えられる。このため経塚群は、13世紀前半から13世紀後半に造営されたとみられる。なお、青白磁合子は年代の判明している他の経塚の事例より12世紀後半から13世紀前半と考えられるが、明確な年代を絞り込むのは難しい。

闘雞神社は熊野参詣道が中辺路と大辺路に分かれる地点に近く、皇族や貴族の熊野参詣に際しては参籠して心願成就を祈願したとされ、熊野三山の別宮的な存在であり熊野別当家が代々所管したとみられる。仮庵山に新熊野神社を勧請したのは熊野別当湛増とされ、その創建には熊野別当家が大きく関わっていたとみられる。

以上のとおり、仮庵山経塚群出土品は、類例の少ない石硯など他に例を見ない豊富な内容を持つことから、当時の経塚埋納品の遺物組成を考えるうえで重要な考古資料といえるだろう。

参考文献

- 公益財団法人和歌山県文化財センター 2013『立野遺跡—近畿自動車道紀勢線事業に伴う発掘調査報告書—』
- 公益財団法人和歌山県文化財センター 2013『シンポジウム資料集 農耕社会成立期の木工—立野遺跡を考える—』
- 伊勢田進 1958 「闘雞神社の仮庵山経塚遺跡」『田辺文化財』2
- 伊勢田進 1994 「仮庵山経塚群」『田辺市史』第4巻 史料編1
- 菅原正明 2012 「第3章 考古資料から見た闘雞神社」『闘雞神社学術調査報告』

奈良時代の須恵器窯跡

—紀の川市 菩提池窯跡の調査—

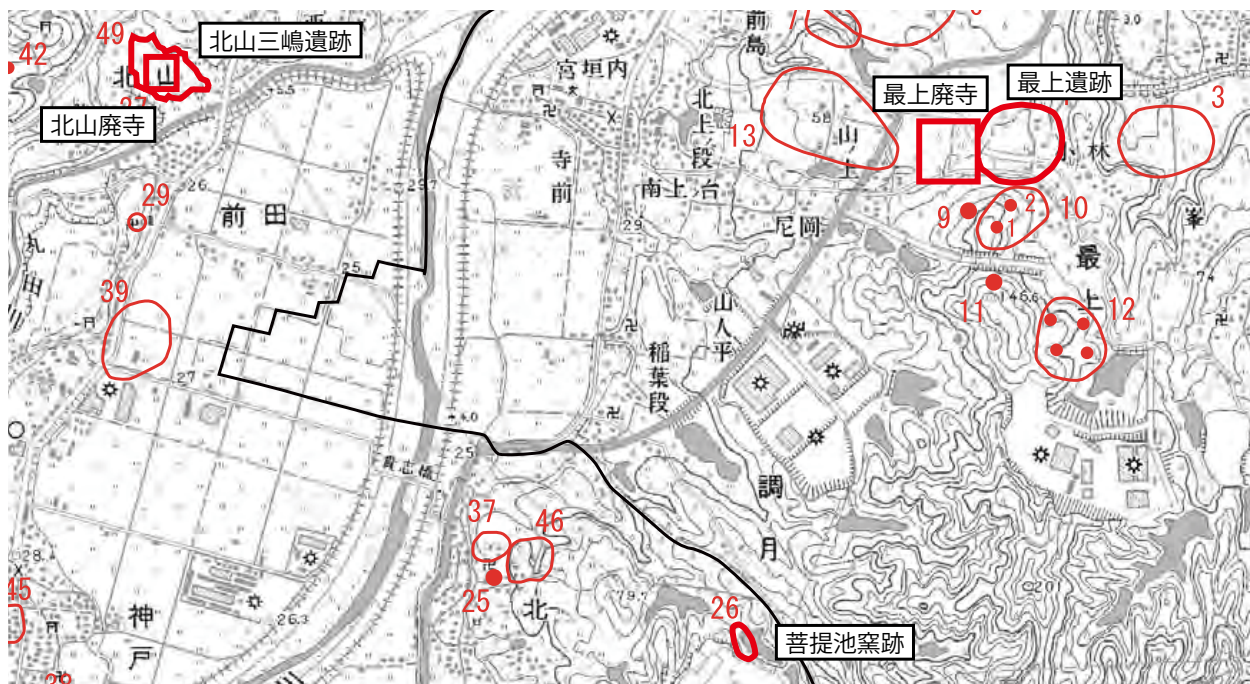
紀の川市教育委員会 森原 聖

1. はじめに

菩提池窯跡は、紀の川市の南側に東西に連なる龍門山系西側の愛宕山から北西に下る丘陵斜面にあり、貴志川町と桃山町の境に位置している。遺跡周辺の地形は、紀ノ川の支流である貴志川が丘陵西を北東方向に流れることによって段丘崖が形成され、丘陵や段丘上には古墳時代後期の高尾山古墳群や北古墳群など多くの古墳が分布している。丘陵の谷筋には多くの灌漑用水池が点在しており、その一つである菩提池の西斜面に窯は構築されている。標高は75 m程度である。池には水が満たされていることが多く、これまで当遺跡の詳細は明らかとされておらず、池の斜面で融着した須恵器が採取されたことにより古墳時代の窯跡の存在が推測されていたのみである。

今回の調査は、堰の改修に伴い池の水が排水された際に行った。開発を伴っていないため、腐葉土や風化した表土を取り除き表面監察のみにとどめている。調査範囲は、窯の分布状況を確認するために、部分的なものとした。

当遺跡周辺には古代の遺跡が多く点在している。段丘・丘陵上には多くの古墳が構築され、白鳳期には北東約1.5kmの地点に最上廃寺、北西約2.4kmの地点に北山廃寺が創建される。奈良時代には最上廃寺に隣接する最上遺跡、北山廃寺を取り囲む北山三嶋遺跡がある。どちらの寺も創建時期は7世紀中頃とされるが、最上廃寺では8世紀前半以降の遺物は出土しておらず、比較的短期間で廃絶したと推測されている。一方、最上遺跡では、それ以降の10世紀頃と考えられる遺物が出土している。北山廃寺は8世紀以降に伽藍が拡張され、12世紀ごろに廃絶したものと考えられている。



遺跡地図

2. 調査成果

調査により、菩提池の西側斜面の広い範囲で被熱した地面と多くの須恵器片を確認した。池は南東から北西方向を長軸とする約 160 m の規模である。その中で、須恵器が確認できる範囲は、北西端の約 35 m の範囲に限られる。調査を行った面積は約 58m² である。窯が構築されている地質は、窯上方は軟質の岩盤（結晶片岩など）で下方は黄色系の粘質土であるため、窯の構築は比較的容易であったと考えられる。調査によって窯の可能性のある箇所は 5 箇所確認でき、いずれの地点でも須恵器片と酸化焰のために赤褐色となった土を確認し、数カ所で還元された窯壁の可能性のある土の塊が採取された。調査地 3・4 では連続する被熱した地面が確認できるため、被熱をより強く受けて箇所を窯の推定箇所とした。表面監察では、青灰色に還元された面は確認できていない。広い範囲で多くの須恵器が採取されたが、いずれも 8 世紀後半に帰属すると考えられる。また、多くの窯は池を構築する際に大きく削平されていると考えられる。

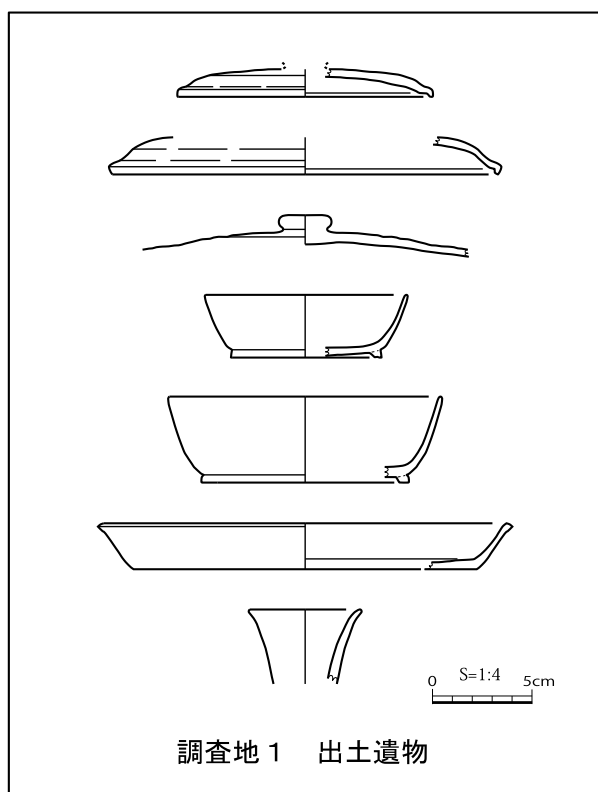
調査地 1 最も南に位置する。この地点より南側では南西方向に湾曲する地形となっており、窯も地形に沿って構築されているため、推定される主軸は東西方向となる。斜面上方は岩盤となっており、岩盤を掘削して窯を構築したものと思われる。遺物は、杯 A（高台無）、杯 B（高台有）、蓋、皿、甕、瓶又は壺の口縁部が採取された。

調査地 2 調査地 2～5 は北東へ下る斜面に構築されている。調査地 2 は調査地 1 から北へ 3.6 m の地点である。上方は岩盤を掘削しており、より強く被熱を受けている。遺物は、杯 A、杯 B、皿、甕、壺の他、還元された土の塊、焼成の甘い土師質の須恵器片が採取された。

調査地 3 調査地 2 の強い被熱痕から 2.8 m 北西の地点である。下方となる東側は大きく削平され、被熱痕が確認できる範囲は狭い。南北方向に長く被熱した土が監察でき、北側へ標高が下がる。遺物は、杯 B、蓋、皿、製作過程で発生したと考えられる柱状の須恵器片が採取された。

調査地 4 調査地 3 に隣接する位置に推測した。広範囲に確認していないため、詳細は不明であるが、還元された擁壁の可能性のある土の塊や 30cm 程度の石が多く確認できた。遺物は蓋などが採取された。

調査地 5 調査地 4 から北西へ 5 m の地点である。西側斜面上方で被熱した土や須恵器片が確認できた。遺物は、蓋、杯 A、杯 B、皿、甕、壺が採取された。



3. まとめ

県内の奈良時代の須恵器窯は、和歌山市の吉礼砂羅谷窯跡、奥須佐窯跡や有田川町の城山・地蔵山・風呂の谷など多くの窯が存在しているが、詳細について明らかではないものが多い。調査により詳細が明らかとなったものとしては、平成元年～5年に湯浅御坊道路の建設に伴って（財）和歌山県文化財センターによって調査された有田川町の土生池須恵器窯跡がある。調査では3基の窯が確認されており、8世紀後半に構築されたものと判断されている。

土生池須恵器窯跡は丘陵部から派生する二つの小尾根の斜面部とその間の谷部分に分かれる。元々の谷部分は池が造られていたとされることから、谷筋に小河川が存在していたことが推測できる。窯は砂質土及び軟質の岩盤を掘削し構築されている。

今回の調査では掘削を行っていないため窯の構造など詳細については明らかでないが、窯の構築場所をある程度特定することができた。採取した須恵器の時期は現在のところ8世紀後半に限られることから、特定の時期に特定の場所への供給が必要となったため一定期間操業された窯であると判断できる。供給先としては、8世紀以降伽藍が拡張されたと考えられる北山廃寺・北山三嶋遺跡に供給された可能性もあるが、同時期の遺物はあまり報告されていない。今回の調査で、これまで明らかではなかった当時の情景をより鮮明に想像することができる成果を得た。今後の課題としては、窯の構造や製品の供給先の他、生産に伴う工房跡、集積場、工人住居跡など、広い視野での検討が必要である。



調査地 1 出土遺物



調査地 2 出土遺物



調査地 3 出土遺物



調査地 4 出土遺物



調査地全景 北東から



調査地3 北東から



調査地4 北東から



地宝のひびき

—和歌山県内文化財調査報告会— 資料集

発行日 平成 29 年 7 月 23 日

発 行 公益財団法人和歌山県文化財センター
〒640-8301 和歌山市岩橋 1263 番地の 1

T E L : 073-472-3710

Email : maizou-1@wabunse.or.jp

U R L : <http://www.wabunse.or.jp/>

印 刷 白光印刷株式会社

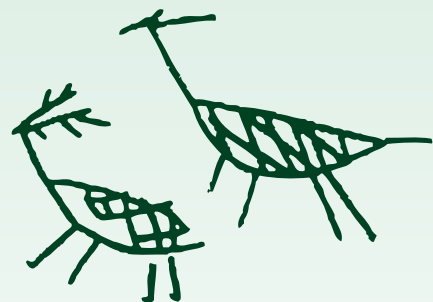


相方遺跡出土土器 高杯（古墳時代）

地宝のひびき

—和歌山県内文化財調査報告会資料集—

- 地形環境復元と集落の形成
—和歌山市津奏Ⅱ遺跡の調査—
- 山裾に展開する集落
—相方遺跡の第2次発掘調査—
- よみがえる中世新宮津の姿
—新宮市 新宮城下町遺跡の発掘調査—
- 太田城水攻め関連遺構について
—友田町遺跡第7・10次発掘調査—
- 中近世の火葬墓を発見
—吉原遺跡の発掘調査—
- 立野遺跡と仮庵山経塚群の出土品
—新規県指定文化財の紹介—
- 奈良時代の須恵器窯跡
—紀の川市 菩提池窯跡の調査—



公益財団法人 和歌山県文化財センター URL : <http://www.wabunse.or.jp/>

〒640-8301 和歌山市岩橋1263番地の1 TEL:073-472-3710